ピアノ部会 **太 田　恵 美 子** 〒182-0033 調布市富士見町 3-3-34 Tel/Fax(042)482-4818	声楽部会 **笠　原　　た　か** 〒524-0012 守山市播磨田町 1456-1 Tel (077)514-0005/Fax (077)514-0036
副理事長　ピアノ部会 **北　川　　暁　子** 〒354-0025富士見市関沢 3-25-4 Tel/Fax(0492)53-4517	理事　財務局長/機関誌出版部長　作曲部会 **橘　川　　琢** 〒108-0073 港区三田 4-11-14-103 Phone(090)2312-5620　Fax(03)3455-7238
理事　弦楽部会 **北　川　　靖　子** 〒165-0027 中野区野方4-38-8 Tel/Fax(03)3385-3284	理事　ピアノ部会 **栗 栖　麻 衣 子** 〒366-0051 深谷市上柴町東2-1-7　武田様方 Tel /Fax(048)572-0125
ピアノ部会 **小　崎　幸　子** 〒207-0014 東大和市南街1-33-9 Tel /Fax(042) 564-3673	理事　Website編集長　作曲部会 **小　西　　徹　郎** 〒365-0057 鴻巣市幸町３－５ Tel/Fax (048)543-4956
声楽部会 **小 室　由 美 子** 〒251-0876 藤沢市善行坂1-21-37 Tel (0466)81-1147	声楽部会 **佐　藤　　光　政** 〒143-0023 大田区山王 2-1-8-822 Tel/Fax(03)3776-6566
声楽部会 **芝　田　　貞　子** 〒162-0052 新宿区戸山 1-18-6 Tel/Fax(03) 3209-9666	声楽部会 **嶋 田　　美 佐 子** 〒277-0863 柏市豊四季 643-25 Tel (04)7175-4731 /Fax(04) 7175-4755
賛助会員　作曲・ピアノ **島　筒　　英　夫** 〒184-0013 小金井市前原町 3-10-5 Tel (042)381-0932	理事　事務局長　オーディオ **高　島　　和　義** 〒344-0023 春日部市大枝 360-1-427 Tel/Fax(048)734-1829

声楽部会 **高　橋　　順　子** 〒157-0073 世田谷区砧8-28-3 Tel /Fax(03) 6411-8322	理事　機関誌副編集長　作曲部会 **高　橋　　通** 〒357-0041　飯能市美杉台5-11-25 Tel/Fax (042)971-0503
理事　出版局長　作曲部会 **高　橋　　雅　光** 〒351-0111和光市下新倉5-14-10クリオ西高島平壱番館305　Tel/Fax (048)465-8229	ピアノ部会 **田　中　　俊　子** 〒211-0067 川崎市中原区今井上町 54 ガーデンティアラ武蔵小杉407　Tel/Fax (044)572-9418
理事　相談役　機関誌編集長　作曲 **中　島　　洋　　一** 〒190-0031 立川市砂川町 5-36-3 Tel/Fax(042)535-3294	理事　ピアノ部会 **並　木　　桂　子** 〒176-0023 練馬区中村北2-2-13-301 Phone(080)3003-2102　Fax(03)5241-8847
理事　ピアノ部会　八王子音楽院 **広 瀬　美 紀 子** 〒192-0046　八王子市明神町 2-23-10 Tel/Fax(042)656-2395	理事　公演局長　作曲部会 **北　條　　直　彦** 〒157-0066世田谷区成城3-5-6 Tel/Fax(03)3417-1947
ピアノ部会 **山　下　早　苗** 〒104-0051 中央区佃2-1-1-1306 Tel / Fax (03)5547-3130	研究・評論　機関誌副編集長 **湯　浅　　玲　子** 〒166-0004 杉並区阿佐谷南1-39-12 Tel/Fax(03)3315-0632 URL:http://www.ac.auone-net.jp/~reiko-y/
声楽部会 **吉　仲　京　子** 〒113-0032 文京区弥生1-2-9 Tel /Fax(03) 3813-1471	

第 545 号

音楽の世界

目　次

論壇　基 礎 体 力　吉田 泰輔　4

新春特集《編集部座談会》
『音楽の世界』のこれから　6
中島 洋一　橘川 琢　高橋 通　湯浅 玲子
小西 徹郎　高島 和義

新企画　リレー連載　**未来の音楽人へ(1)**　深沢 亮子　22

長期連載

音・雑記ーひなの里通信ー (54) ・・・・・・・・・・・・・ 狭間 壮　28
名曲喫茶の片隅から (35) ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮本 英世　30
音 盤 奇 譚 (40) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 板倉 重雄　32
私とラジオ・ドラマ (7) ・・・・・・・・・・・・ 助川 敏弥　34

コンサート評　ピアノと室内楽の夕べ　浅岡 弘和　36

短期連載

電子楽器レポート・連載（全４回）－2
２０１２広州国際電子キーボードアーツフェスティバル他　阿方 俊　38
福島日記(16)　小西 徹郎　40

コンサート案内

社会福祉法人　緑の風を支援するチャリティーコンサート
世界にはばたくヤングアーティストシリーズ(1)　42
『kayoko の倍音サロン』のお知らせ　43

CMDJ 会と会員の情報　44

新年会のご案内　47

論壇

基　礎　体　力

音楽学　吉田 泰輔

この国が抱える負債総額は天文学的水準に達し、常識的には返済不能に陥っている。他方、国際収支は、世界不況と大震災の影響なのか、貿易収支等の大赤字を海外資産からの果実で補うという図式が続いている。国の体力を支えるのが経済なら、門外漢の筆者でさえ、この国の体力は年々、というより時々刻々衰えており、そこから派生する深刻な問題が、政治家のマニフェストのような小手先仕事では片づけられないことぐらいは理解できる。その衰退の皺寄せが社会生活の隅々にまで及び始め、文化・芸術のような生きることに不可欠と思われていない分野が真っ先に切り捨ての憂き目に会っていることは、読者諸氏の先刻ご承知のことである。国の体力の衰えが、文化の衰退に繋がり、それがまた人間力の後退と連動する、世情を騒がす近年の様々な悪しき社会現象の増加の背後にこの悪循環が在るのではないかと疑うのは筆者一人ではあるまい。こうした時代の到来を予測し基礎体力を順風の時期に確りと養うどころか、自らの力量を過信し、先を争い冨や目先の華やかさを追いかけて徒に財と時間とエネルギーを消費してしまったつけが回り始めている、それが現在のこの国の状況なのではないだろうか。

国の体力もさることながら、筆者が憂慮しているのは人の体力の減退、それも若い世代のそれである。かつては人が活動するためには自らの足を使っていた。通勤にせよ通学にせよ、まず歩くことが前提だった。歩く長さの基本単位はキロであり、普通どこかへ出かけるとなると何キロもの歩行を当然のこととしていた。その後の経緯は今更述べるまでもない。そして現在、歩行を慣習としてきた世代は概ね高齢者に分類され、移動とは電車・バス・自動車に依存することを当然と考えている者が世代を新しくするごとに増加し、歩く単位はキロからメートルへと移行した。

体力とは体幹の強さに深く関係しているというのが筆者の偏見で、この体幹を鍛えるべき時に鍛えておかないと、将来に憂いを残すことになろう。というのも、筆者は肋膜のため小学校の四年と五年のそれぞれ半年近く運動とは無関係な生活を過ごさざるをえず、回復後もはかばかしい運動ができなかったため、職業人になって体力の無さを痛感させられる機会が何度もあったからである。「心身」という言い方があるが、私は「身心」に親近感を持っている。身体が衰えても素晴らしい仕事をする方が居られ、筆者は大いに敬意を払うのだが、当方は真逆で、体の具合が良

くないとたちどころに思考力・判断力が低下する。だから、確りした基礎体力の上に活発な精神活動が展開されるはずだと信じ込んでいるのである。

そういう筆者の頑なな頭からすると、若い世代の「身心」は甚だ危うく思われるのである。通学には乗物を使い、遊びはキーボード、クラブスポーツでもしていなければ身体を鍛えるどころではない。このような身体の持ち主に、創造的で豊かな精神活動を粘り強く展開することができるのだろうか。中高年が階段を上り若人がエスカレーターで昇る、パーティーで立ち話の際に周囲に目を転ずると立っているのは年寄りばかり、こうした光景に出会った方は少なくないはずである。

ところで、筆者は、音楽大学に四十年もお世話になり、有難いことにそこで色々な経験をさせていただき、学生諸氏や卒業生諸氏の演奏に接する機会も多かったが、それらは筆者の聴体験の中で悦びと忍耐との複雑な軌跡を残している。在職期間の前半は学生数の増加期、後半は減少期と概括することができよう。思い起こすと、前半期には「これはひどい、到底水準に達していない、卒業後どうなるのだろう」と思う者も居た反面、皇居での御前演奏に出演し出席者を唸らせる歌を聴かせた学生もいたが、総じて、自分がなにものかになるはずとの強い思いで音楽に立ち向かう姿勢が感じられ、荒削りでも何かの一発で全部の瑕疵（かし）を帳消しにする、そうした心身から発する気迫＝エネルギーを周囲に感じさせる者が少なくなかった気がしている。それと比較すると、後半期は、技能はそれなりに纏まり大きな失点はないけれど、将来の可能性を感じさせる若者が目に見えて減少してきた。生活、環境などの諸条件は、それ以前に比べ遙かに整ってきたのに、これは一体どうしたことか。

長々しい前置きの末に筆者が言いたいことは、賢明な読者のお察しの通り、音楽、それも特に自らの身体を使って表現する分野では、体幹の強さあるいは内蔵を含む内側の筋力が必要とされるのではないか、ということである。国際的に活躍する日本人の某声楽家が、旅の途中でもジョッギングを欠かさないと書いていたのを読んだ記憶がある。その点で最近の私たちの社会が辿ってきたプロセスは、あるべき方向と反対の道を進んできたと言えまいか。そして、この道を筆者の考える道へと戻すには、今では個人の努力の範囲を遙かに超えており、社会組織の変革、例えば学制、とりわけ初等・中等教育の制度の根本的変革なしには不可能だと思われる。プラトンではないが、文芸と体育を人間形成の柱から外すべきではないのである。

（よしだ・たいすけ　音楽学：国立音楽大学名誉教授）

新春特集

編集部座談会『音楽の世界』のこれから

出席者
中島 洋一：作曲／本誌編集長
橘川 琢：作曲／本誌副編集長／本会機関誌出版部長
高橋　通：作曲・一弦琴奏者／本誌　副編集長
湯浅 玲子：音楽学／本誌副編集長
小西 徹郎：作曲・パフォーマー・講師／Web サイト編集長
高島 和義：オーディオ・録音／本会　事務局長

電子化の時代に版の雑誌を刊行することの意義

中島：今日はありがとうございました、
今は電子化の時代ですが、我々は 50 年『月刊：音楽の世界』を印刷物として発行し続け、今に至っています。インターネットの時代、印刷雑誌を発行し続けることにはどのような意義があるのでしょうか。

橘川：意義ですか。そうですね・・・最近、二週間前、ネットに掲載されていた半年前の新聞記事を読みたいと思ったら、もう消えて無くなっているということがありました。大手新聞のネット版でも、半年前あたりの記事が無くなり読めなくなっているところもある。データを小さくする事も、圧縮保存する事も、検索する事も、紙の媒体より得意なはずの電子の世界でのことです。第一次資料となるべき貴重なデータが発信源のサイトで閲覧すら出来ない。そういうこともあり、いまの段階では電子情報の保存性に対する信頼、ここにまず疑問があります。

高橋：私は、現在大したことはしていませんが、電子出版部長の地位にあります。電子情報にしろ、印刷物にしろ、人に伝えるという目的は同じだから、大概は電子情報でもいいと思います。ただ電子情報でも中味は伝えられますが、書籍のような印刷物として残さないと伝わらないものがある。例えば、染みとか、多くの人が読んだことによる汚れなどは、現物がないと伝わらない。デジタルは所詮虚構の世界ですから。でも、雑誌を印刷物として発行することが必要かとなると、よく判らない。私は、新聞は取っているが殆ど読まない。ネットで色々な新聞の記事が読めるので、印刷された新聞を読む必要性はあまり感じないですね。でも、デジタルの保

存手段はまだ完成していないので、大事な内容が掲載されているものなら、雑誌でも、CD でも物で残しておいた方がいいとは思います。

勿論、デジタル情報も保存しておくことは可能だが、ただ、ツイッターなど、ネットの情報は、残しておいた方がよいと思う情報は少ないですね。

橘川：そうですね。残したい電子情報であっても、やたらに保存すると、あとで整理がつかなくなる。単に伝えるだけなら電子情報は得意ですが、確実に残すとなると印刷メディアの方にまだ優位性がある気がします。

高橋：それと、私の妻などインターネットはやらないので、入って来る情報はテレビか、新聞、雑誌などの印刷メディアしかない。子供の時からインターネットを使って教育を受け生活をしている若い世代はともかく、年配の世代にはそういう人間も多いのでしょう。私の世代など、まだ半数くらいがネットにあまり縁のない生活をしていると思います。

音楽現代

2013 年 1 月号　　特別価格 1,050 円

♪特集＝今、指揮者の現在
　～２０１２年指揮者感動体験、イギリス・フランス・ドイツ・アメリカのライジング指揮者たち、世界の主要オーケストラ・歌劇場シェフ・リスト付
♪特別企画＝２０１３年に来日する演奏家たち
　〈巻末来日演奏家一覧付〉
♪カラー口絵
・日生劇場オペラ「メデア」
・ウィーン国立歌劇場「アンナ・ボレーナ」
・関西歌劇団「ポッペアの戴冠」
・関西二期会「コシ・ファン・トゥッテ」
・トナカイサロンオペラ「イル・トロヴァトーレ」
インタビュー＆会見語録
　池辺晋一郎、エディタ・グルベローヴァ
　イリヤ・イーティン、藤井一興、川越塔子
　砂川涼子、村上敏明

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

橘川：今でも持っているのは FAX くらいまでという人も意外と多いです。

湯浅:情報を手っ取り早く集めたいとき､ネットやタブレットも利用できますけど､実際に手に取らないと判らない資料もあるし､やはり印刷物は研究には不可欠です。雑誌でも娯楽雑誌のように消費されてしまうものは別として、印刷物の場合は、自分が知りたいと思う情報に辿りつく時間が短く済むと思います。ネット情報の場合は目的に辿り着くのに時間がかかる場合がありますね。

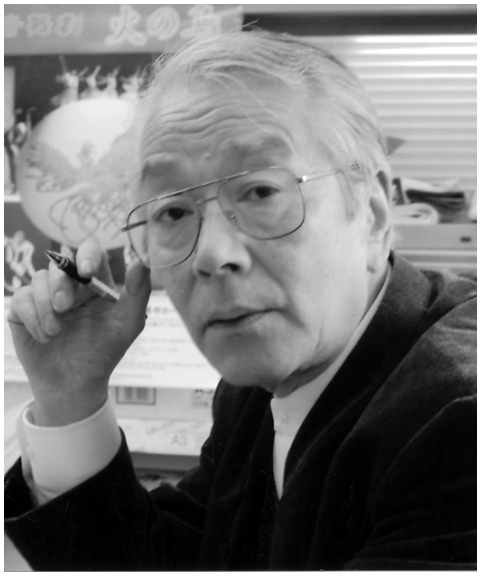
橘川：グーグルなどで検索する際、何かのキーワードで検索するとあまりに大量のデータが表示され、気が滅入ってしまいますし、タイトルが微妙に変えられたりしていると出てこないこともある。

高橋：検索機能にも問題がありますね。アクセス頻度の順で出て来るんですね。重要度じゃなくて。
中島：しかし、重要度の序列を誰が判断しますか。
高橋：そう、それが難しいですけどね、将来は、知識人が集まって作った検索サイトのようなものが出来てもいいんじゃないですか。まだないんですね。
橘川：検察サイトではないけど、Wikipedia などは時々閲覧しますね。偏りはあるけど、知識人・一般人それぞれ知恵を出し合って作っているだけに、色々な視点から書かれていて面白い面はある。ただ書かれた情報に署名がないし引用元の記載もない事が多い。残念ながらまだ、論文作成の際に引用するほどの信頼性は弱いと思います。
湯浅：『音楽の世界』の電子化はまだ必要ないですが、宣伝を兼ねて４Ｐ程度の抜き出しを流してもいいかもしれません。立ち読みする程度の。
橘川：そうですね、ダイジェスト程度のページ数で・・・。ぜんぶ電子化して無料で流したら雑誌が売れなくなってしまいますしね。（笑）
中島：次に小西さん、どうですか
小西：本の媒体は紙ですね、火にくべたら燃えてしまう。水につけてもダメになってしまう。でも、全部なくなるということは滅多にない。一方、電子情報はサーバで全部管理しているので、サーバがやられたら全部がパーになる。
高橋：しかし、バックアップはとっているでしょう。
橘川：それに、電子情報の場合ネットで流せば、情報が拡散して、個人でも保存できる。従って発信元の情報が消滅しても、どこかで誰かが残している可能性はある。
小西：そうですが、モノの文化は大切にしたいですね。電子機器はどんどん便利になり、また、デスクトップ、ノートパソコンからタブレット、スマートホンと、小さく使いやすい方に移って行く。やがて、紙などの物が少なくなり、いずれは、ほとんどの情報を電子で受けとるような時代になって行くかも知れない。しかし、完全に無くしてはいけない。例えば、ネット配信された音楽を聴く機会が多くなって行っても、生の音楽が必要でなくなっていいかというと、絶対にそうではない。電子情報が発達しても、紙の文化は残さねばならない。
橘川：今は過度期かもしれませんが、電子に全面的移行していいのかとなると大いに問題があると思います。また、伝達する情報媒体が新しいものに移って行く時、前の媒体の情報がすべて新しい媒体に引き継がれて行く訳ではない。例えば音楽の録音についてもＳＰ盤からＬＰ、ＣＤ、ＭＤ、そして今では今では iTunes 内でのネット配信などへと移っていっていますが、前の媒体に記録されていたものが、すべて新しい媒体へと引き継がれて行く訳ではないのですね。大切な、貴重な記録を、

前の媒体に置き去りにしてしまうこともある。LP に残る歴史的名演が CD 化されないままだったり。

ですから紙の情報、紙の文化をすぐに手放すのではなく現役の生きたメディアとして残しておくことは重要だと思います。今でも機密文書は紙に残しておくという事があるようですが、しばらくそれは変わらないのではないかと思います。

高島：話しが大きくなり広範囲が広がりましたが、『音楽の世界』に話しを戻しますと、一番重要なことは、印刷版『音楽の世界』は、すべての発行号を国会図書館に残しておけるということだと思います。それは出てもすぐ消えてしまう可能性が高い電子情報との大きな差です。国会図書館に残っていれば、現在、および未来に生きるすべての人々が希望すれば、すべての発行号を読むことが出来るということですから。



高島 和義

ですから、一時、本会内で「印刷版の機関誌『音楽の世界』の刊行を続けることは財政的にきついから、メルマガに切り替えた方がいい」という話しが出たとき、私は大反対したんです。

中島：ネットの情報は、この瞬間の今を知るためには便利だけど、「今」は過去からの連なりで形成されているものです。「今の瞬間」だけを見ていては、ほんとうの「今」を掘り下げて知ることが出来ません。例えば現代の音楽史を大雑把に振り返ってみると音列主義が一世を風靡した時代、その後偶然性の音楽、電子音楽の経験に基づくトーンクラスター手法、ミニマル・ミュージック、そして８０年代はそれまでの前衛音楽への見直しの風潮が起こり、リゲティ、ベリオのような大家の手法が変化するなど、色々あった。戦後の国際政治を振り返ってみると、東西冷戦時代、ソ連東欧社会主義体制の崩壊、ユーロ圏の設立、会報、改革開放政策により経済発展した中国の躍進など、大きくうねりながら変化して来ている。「今の瞬間」だけに囚われていると、今という時代に流されかねないし、それでは未来も見えてこない。過去からの連なりを見渡すことで、「今」がしっかり捉えられ、未来への展望も開けて来ます。話しを『月刊：音楽の世界』に戻しますが、この雑誌は 50 年刊行され続けており、全部残っていますので、小さな世界かもしれませんが、この雑誌だけ読んでも時代の変化を垣間見ることが出来ると思います。

橘川： 50 年が線になって残っているということですね。このまっすぐな線を軸として時代の変化、歴史を観られるというのは貴重な事ですね。

残すということ

高島：電子メディアの歴史は１００年にも満たないのですから、まだ未完成でしょうね。文字情報を残して来た歴史は5000年、紙が発明されてからでも2000年の歴史がある。残すということを考えると、紙の方がいい。

橘川 琢

橘川：この雑誌が発行された頃は電子情報メディアもなく、月刊誌としては速報性も重要な要素だったでしょうが、現在は速報性という点では残念ながら電子メディアには全く敵わない。ツィッターやＳＮＳでは、今現在起こっていることを、当事者が現場からリポートしてすぐ情報を流してくる。そうすると、紙媒体の「残す」という使命が今の月刊誌ではとても大切ですね。

高橋：でも、この雑誌の版下は、印刷所には電子データで送っている訳だから、電子情報として読んでも、印刷した物を読んでも内容は変わらない訳でしょう。

電子情報も、ハードディスク、DVDなどに保存しておけば、残せるし。

小西：でも電子情報は改ざんできますね。誰かがそっと改ざんしても、それがオリジナルの情報か、改ざんした情報かどうかを見分けるのは難しい。印刷したものは改ざんができない。

橘川：ええ、私はものを書くとき、それが印刷されるものだと、もう直せないという意識が電子媒体への執筆のとき以上に働きます。特に編集の際には校正作業に神経を使います。

中島：先ほど電子情報も残せるというお話しがありましたが、単に物理的な保存能力ということだと、電子も紙も一長一短で優劣つけがたいと思います。ただ、残るという条件には、物理的なものと人為的なものがあります。今は記憶メディア発達しているので、大容量の電子情報の保存が可能です。ただ、個人で保存したものは、その人が亡くなると、捨てられてしまったりする可能性が高い。一部の情報が残されても殆どの場合、近親者に渡るだけでしょう。所属した団体が残っていれば、情報は団体に引き継がれるでしょう。しかし、団体も消滅してしまったら、殆どすべてが消えてしまうのではないでしょうか。先ほどの高島さんの話しにあったように、『音楽の世界』は国会図書館にすべての号が残されるから、50年、100年後、ある

人が、自分の家族史を調べ、曾祖母が日本音楽舞踊会議という団体に所属し、会のコンサートに出演しており、その会は『音楽の世界』という雑誌を刊行していたということが判れば、国会図書館で『音楽の世界』を探して読み、自分の曾祖母が演奏した曲名、顔写真まで知ることが出来ます。西郷隆盛という人は有名な歴史上の人物ですが、写真が残っていないので、誰も彼の写真を見たことがないのです。一方、本会の会員ならば、コンサートなどに出演したことがあれば、現在、未来の多くの人が、その写真に接する機会を持つことが出来るということになります。

『音楽の世界』の社会的、文化的役割と読者ターゲット

中島：『音楽の世界』の性格、社会的役割について, 皆さんはどのようにお考えですか？

高島：今度は編集長から先に発言して下さい。

中島 洋一

中島：私は、音楽を中心にしながらも、他のジャンルの芸術、歴史、社会まで広げて論ずることが出来る雑誌にしたいと考えています。音楽も人の営みですから、見える糸、或いは見えない糸で、人間が築いた文学などの他部門の芸術、そして歴史、社会と繋がりを持っていると考えます。しかし、今の時代は複雑でマクロ的視野を持つこが難しく、相互に繋がっている糸を探して辿って行くことは困難でしょう。その分、読みやすくやさしい文章表現を心掛けたいと思います。劇作家の故井上ひさし氏が語っていたように、「難しいことをやさしく、やさしいことは深く」をモットウにしたいと考えています。

湯浅：私は『音楽の世界』の毎号の表紙に「音楽家が自ら作るマンスリージャーナル」と表記してあるように、音楽家自身が自分の自由な意志で発信している雑誌である、という基本的性格は絶対に無くしては行けないと思います。そういうことのために、読者層が広がらなくとも、あまり気にする必要はないと思います。

橘川：そうでうすね。色々な雑誌があるけど、音楽家が自ら作る雑誌と宣言しているのは『音楽の世界』くらいではないでしょうか。

湯浅：ええ、それで音楽家も、社会や他の芸術にも興味を持っている訳ですから、その基本線が崩れなければ、内容が音楽以外のことまで広がって行っても、構わないと思います。

橘川：例えば、私が『音楽の世界』の書き手を捜す時は、音楽にまったく関係のない人への依頼はやはり躊躇します。ただ、一見音楽との関係が薄い方でも、その人の分野での体験や教えが音楽にも通じる場合、面白そうだと考えて執筆をお願いすることはあります。

中島：音楽をやっている人間が音楽を中心にしながらも、他の世界まで広げて論じ、音楽家や、あるいは音楽に興味を持つ他部門の人が、書かれた内容に自分との接点を探し読める雑誌ということでしょうか。

ところで、次は小西さん、どうですか。

小西 徹郎

小西：私は音楽屋でしょうが、音楽だけでもないし、クラシック現代音楽だけの人という訳でもありません。サラリーマンの経験もありますが、音楽をやってアートをやっていると、それが生きて来るんですね。私は音楽だけでなく、舞踊とか美術が好きですが、そうゆう人達と接することで、新しい発見があったり、向こうも新しい発見をしてくれたりするので、そういう交差が面白いです。それで、そういうことを文章に書くわけですが、読んだ人がこういう世界、こういう見方もあったのかと思って下されば、嬉しいです。

中島：次に高橋さんどうですか。

高橋：難しいですね。トータルのターゲットはあると思いますけど。私は編集に関わっている関係で毎号殆ど全部読んでいるけど、受けとった人によって、この記事は面白いが、こちらは面白くない、ということが当然あると思います。これだけ色々な人がいて、考えていることも違うんだから、あまり、社会的役割とか、読者ターゲットなどということを窮屈に考えないで、それぞれが書きたいことを書いて、読みたい所を読めばいいと思います。

橘川：小さな雑誌ではありますが、内容的に広いですからね。編集している我々は、やはり読者に喜んで読んでもらいたい、という思いを込めて作業をしています。時には、極度の専門性や、音楽との距離感から読者層の中心から外れる記事もあったりしますけれど、この雑誌を手にしている人の他の興味を知る事も出来るわけですので、多様性の一助になれば・・・。

『音楽の世界』は機関誌か？外に向けた音楽ジャーナルか？

中島：次に、『音楽の世界』は日本音楽舞踊会議の機関誌であると同時に、一般の音楽家、音楽愛好者に向けた雑誌でもあり、そのバランスをどのようにとるかということが、昔からいつも問題になってきました。機関誌だから会員の活動の紹介、会員の記事を優先すべきだという意見がある一方、もっと外に顔を向けるベキだという意見もある。しかし、会員が執筆したものだけでは内容的に狭くなるし、それではかえって会員の利益にもならない、ということになり、その時代、時代で落ち着くところに落ち着いて来たと思います。

橘川：この雑誌がこの団体から外れる訳には行かないし、外れたら糸が切れたタコのように、フワフワと風任せ、世任せになってしまうと思います。やはり、日本音楽舞踊会議という軸があってこその雑誌であり、会員の皆さんが何を考え、何を知りたがっているか、ということを常に考えながら編集して行きたいと思います。代が変わって構成メンバーが変われば、カラーも内容も変わって行くかもしれませんが、根の部分は機関誌である以上揺るがないと思います。そして、少なくとも会員の皆さんが自分の雑誌として手に取り書棚に飾っておけるような雑誌でありたいと願っています。

湯浅 玲子

湯浅：私も編集に関わってから 15 年以上になりますが、機関誌としての役割については、会のコンサート関連の記事や会員の活動について掲載するということで線を引きやすいと思います。一方、対外的な雑誌としての特徴をどこに求めるかは難しく、一頃、外部のタイムリーなコンサート情報を載せた方がいという意見が出て、載せたこともありましたが、そういう記事では、数量、情報量とも商業誌とは太刀打ち出来ないので、やはり、載せなくていいのでないか、ということになりました。ただ、商業誌は特定の演奏家を持ち上げることが多いのです。しかし、この雑誌は、自分が書きたいこと、主張したいことが自由に書けます。そこが、商業誌とは違う、この雑誌の良さと思います。

中島：商業誌と違い、書き手の自主性、自発性が妨げられないということですね。

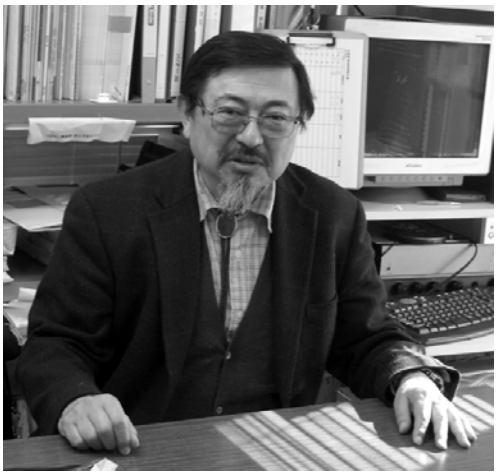
高橋：うーん、会の名前が日本音楽舞踊会議でしょう。それなのに機関誌が『音楽の世界』で、舞踊という文字がどこにもない。また記事も舞踊関係の記事が殆どない。たまたま、11 月号、12 月号には、井上さん、清水さんの記事が載ったけど。だ

から会の名前から「舞踊」をとってしまえ、と言っているんですよ。それを言うと（高島氏を指さして）こちらの人には怒られるんだけど。
高島：初期の頃は、バレエの石井桃子さん、小林恭さんなど、舞踊関係の人も結構いましたね。今は、芙二三枝子さんだけですけど。
中島：舞踊会員は少ないけど、嘗て『舞踊と電子音楽の夕べ』など、舞踊部門と連携したかなり大きなイベントを続けていたことがありましたね。そして、最近になって、高橋通さんが企画した『動き、舞踊、所作と音楽』という舞踊部門などを取り込んだ催が再開されています。日本音楽舞踊会議の特徴は音楽を中心にしながら他部門の芸術と交差できる柔軟性と広がりにあると思います。小西さんのように、美術や舞踊と関係の深い人も入会されたことだし、今、会名から「舞踊」の文字を取ると、活動範囲を広げて行こうとする勢いに水を差すことになるので、高島さんが怒るのだと思います。
高橋：ところで、舞踊の人は文章を書くことは得意ですか。
中島：芙二三枝子さんにように筆が立つ方もいらっしゃいますが、一般的に言うと演奏家と同じで、文章を書くのはあまり好きではないようです。
中島：『音楽の世界』の機関誌としての役割について、会員歴の長い高島さんはどうお考えですか？
高島：私は狭い意味での会員向けの情報は、巻末の「会と会員のスケジュール」程度でいいと思います。それより、自分達の考えを外に向かって発信して行くことがより大切と思います。それも広義の意味で機関誌の役割と考えてもいいでしょうが。

編集について
中島：前にも話しが出ましたが。『音楽の世界』は、他の音楽雑誌にみられないほど、広い内容を包含していますね。それについてはどうですか？
橘川：内容の広がりということに関することで、伝聞形で恐縮ですが、あるピアニストが世界的コンクールでの優勝後、10 年ほど演奏活動が控えめになっていたそうです。一説には、ピアニストとして研鑽を積む間に出来なかった事を取り戻し、自分の人間の幅を広げるため、教養を深めるため、大学などで勉強をしていたと。
なるほど、我々の子どもの頃を振り返っても、国語が好きだからと言って国語ばかり勉強した訳でなく他の勉強も色々した。多くの勉強をして、一人の人間は育ってゆきます。音楽が専門だからといって、それだけやっているのは何かが足りない気がします。
中島：そうですね。「浅く広く」、「深く狭く」という言葉があるけど、狭すぎては本当の意味で深く掘り下げることは出来ませんね。

橘川：高い山は裾野が広いという言い方も出来ますね。

高橋：私は音楽大学で学んだわけではないので、逆にもっと音楽的に専門的な記事が読みたいですね。12 月号は「会創立 50 周年記念号」ということでしょうがなかった点もあるが、音楽の廻りのことが書いてあるけど、音楽の専門的な記事がない。



高橋　通

以前、岡珠世さんの記事で「バッハの装飾音」のことを書いた記事があったが、あれは面白かった。ああいう記事は音楽之友などにはないですね。

湯浅：昔はありました。

高橋：昔は「音楽芸術」もあったし。専門的な記事を読める機会があった。対外的に開かれた雑誌を目指すなら、もっとそういう記事も欲しいですね。

中島：読者には専門家ではない音楽愛好家もいるので、専門家と音楽愛好家の両方が読めるような工夫が必要でしょうが。

高島：昔はこの会に評論系の人が多かったが最近は少なくなり、演奏家系の人が多くなった。演奏系の人は書くことが好きじゃないかもしれませんが、もっと書いてもらえるように働きかけて行かないと。

中島：作曲法的なことなら、音大に勤務する作曲、音楽理論系のひとから書き手を調達することは出来るんですが、演奏法的なことについては、演奏系の人に書いてもらいたいですね。

湯浅：私も大学の先生方や専門の方が雑誌向けに専門的な記事を書いているのを見ているから知っていますが、きちんとしたものを書くとなると、費やす労力は大変です。ですから大学などで発行している紀要論文などから面白いものを探して、『音楽の世界』用に書き直してもらうとか、大学院で修士論文、博士論文を書いた人に、その論文を『音楽の世界』用に書き直してもらうとか、色々なルートが考えられると思います。私も少し手助けをしたことがありますが、演奏系の院生が書かれる論文も、指導教官がいて指導しており、レベルはそんなに低くはないと思います。

橘川：本会の演奏会員には、大学院を修了した修士も大勢いますし、声楽の湯川さん、ピアノの東浦さんのように、音楽の博士号も持っている人もいますね。

中島：外からの調達も可能ですが、まず、そういう若い会員に書いてもらいたいですね。

橘川：取り上げるテーマは色々ありますね。

湯浅：装飾音符の問題とか、詩を生かした歌唱のあり方とか、演奏系の人が興味を持って読むようなテーマだといいですね。
中島：また、最近は新しく作曲家自筆の楽譜が発見されたりしているので、それに絡めた研究なども面白かもしれませんね。
橘川：そういう論文の場合、当然譜例が必要ですが、「フィナーレ」などを使いこなせる人が編集部にもおりますので、問題ありませんね。

若い人の本音を聞き出したい

中島：ところで、専門的な研究論文に関する話題が話されましたが、そういうものだけではなく、自分の生活と芸術活動について、若い人の本音を聞きたいですね。
高島： 20 代、30 代の若い会員って、どれだけの数がいますか？
中島：青年会員を含めれば、かなりの人数がいる筈です。でも、世代に開きがあるからか、なかなか本音を聞き出せないような気がします。

本番前のリハーサルで演技をつけて練習する若い会員たち（2010 年９月）

橘川：小西さんは、若い人達を教えていらっしゃいますが、若い人が特に食いついてくるのはどんな話題や問題についてですか。
小西：就職の話しとか、会社に入ってからどうするとか、どのように生活費を稼ぐか、というような問題ですね。
橘川：それは、やはり切実な問題ですね。
中島：私は音大生、総合大学の学生の両方と接点を持ちましたが、音大生では好きな音楽を続けながらどう生計を立てて行くかが悩みの種だし、総合大学でも、講義期間が終わった後、TA（ティーチングアシスタント＝Teaching Assistant）をしてくれた学生と飲食し話しを聞いたりしたのですが、ただ待遇の良い就職先を見つけ

ればいいということではなく、そんなに給料が高くなくとも、自分のやりたい事が生かせる仕事につきたいという希望が強いようです。人にもよりますが、そうした健全でしっかりした考えを持った学生も少なからずいるようです。

橘川：音大生の場合はどうですか？１、２年生の頃は、将来に対する夢を膨らませていると思いますが、３年生の頃にもなると将来を考えやはり不安になってくるのでは？

『若い翼による CMDJ コンサート』後の懇親会の席で
前列左は戸引理事長　（2009 年 7 月）

中島：そうかもしれませんが、狭き門を潜って大学院に進学したような学生は、在学中は将来の音楽活動に備え、専門を磨いて行こうという気持ちが強いと思います。生活と芸術活動の板挟みになって悩むのは、大学生活を終えて世の中に出て現実の壁にぶつかってからと思います。そのような悩みを持つ人は、本会の若い会員の中にも結構いると思います。そういう人達の本音を聞きたいですね。そのような悩みを持つ若い会員を支援し、音楽家として育てて行くのもこの会の大きな使命の一つと考えているのですが

橘川：さらに、出来れば壁にぶつかる前の声も聞いてみたいですね。

小西：若い学生は企画書など、書類の書き方もしらない。就職するためには、そういう能力も必要だと言うと、意気消沈してしまいますね。やはり、卒業するのが怖いという気持がありますね。卒業してもフリーターなどをしながら、音楽活動も続けたいと考える。ようするに就職することが怖いのです。

橘川：本気で選んだ音楽の道でしょうが、社会への一歩がやはり怖い？

小西：一歩、二歩踏み出してくれるには、強く肩を押してあげる必要がありますね。

中島：ところで、若い音楽家の生の声を、『音楽の世界』でも取り上げたいですね。今の若い人はなかなか本音を言わないかもしれませんが。

湯浅：そういう、若い会員にエールを送るために、私は１月号から始まるリレー連載「未来の音楽人へ」を企画しました。はじめのうちはベテランの方々が登場する予定なので、「同じような話が続くのではないか」というご心配の声もあるようですが、私がそこで期待しているのは「どのように音楽を続けてきたのか」という様々な道のりを若い方々に知っていただくことでもあるので、同じ内容になるという心

配は持っていません。そして、連載を続けている中で、若い人に書いてもらうのもいいと思います。たとえば、卒業して間もないくらいの若い方が在学中の音大生、もしくは音大を目指す学生に向けて書くようなものもあってよいと思います。

中島：なるほど企画の主旨はよくわかります。ただ、若い人に順番が廻る前に、2012年7月号に掲載した「特集：若い会員は語る」の第2弾、第3弾を今年中に打ち上げ、若い人達の声を取り上げて行きたいと思います。

橘川：若い人たちが、この雑誌、そして会活動に興味を持ってくれると、会の将来は明るいですね。

その他、取り上げてみたい企画

中島：その他、採り上げてみたい企画がありますか。

橘川：高橋さんは日本の伝統音楽がご専門ですが、伝統音楽についての企画をお持ちなのではありませんか。

高橋：邦楽関係全般について、それほど広い付き合いがある訳ではありません。しかし、「語り物」を極めてみたいと思っています。

中島：この会の人はクラシック音楽を専門にしている人が多く、私も含め、あまり日本の伝統音楽のことについては知らないと思います。知人に雅楽、あるいは古曲などの研究で著名な人がいるので、機会をみて、そういう人たちにも書いてもらおうと考えています。

橘川：そういう方々に書いていただく場合、専門的なことだけではなく、専門用語を判りやすく解説してくれるような「手引」や、より深いところに進むための「導入」のページなどつけていただけるといいですね。

『音楽の世界』のこれからについて

中島：大体の事は話しが出ましたが、このあたりで、『音楽の世界』のこれからについて語ってもらいたいと思います。

湯浅：刊行を続けることは経済的には苦しいと思いますが、世の中に迎合しないで、音楽家が自分達で考えたことを、自分達で発信して行くというスタンスは絶対に守って行くべきと考えます。質を維持して行くためには、慌てて即席の記事で埋め合わせるようなことは避け、もし原稿が集まらないなら、隔月刊行にしてもいいと思います。それと高齢の読者が多いので、もっと文字を大きくすると、見やすいのではないかと思います。

高島：以前、文字が薄いという問題がありました。しかし、標準フォントを変えることで、この問題はかなり解決しました。文字サイズは、いまでも新聞の活字よりは大きいと思います。

中島：通常使うフォントは 13 ポイント、二段組でレイアウトした文字や、コンサートプログラムなどは 12 ポイントの文字を使っています。ただ二段組の記事については、著者から文字をもっと大きくして欲しいとの要請があったので、12 月号から 13 ポイントの文字を使っています。

高島： A4 版で 13 ポイントの文字を標準に使い、それを A5 版に縮小印刷している訳ですね。文字の大きさは１／√２　になりますが、それでも新聞の活字よりは大きいと思います。これ以上文字を大きくすると、掲載出来る情報量が減るという問題もありますね。

小西：高齢者が多いということは読者層が固定しているからではないですか。私はもっと流通を広げたいと考えます。自分達の声を、もっと多くの人々に聞いてもらうためには、内容も大事だけど、書店に並べてもらうなど、どうやって広げて行くかを工夫すべきと思います。読者層も広げて行きたいと思います。新年号から私の文章にイラストを挿入するようにしたのも、そういうことも考えてのことです。

湯浅：昔を思い返すと、私は音大在学中に『音楽の世界』という雑誌の存在を知りませんでした。ですから、まず若い人達にこの雑誌の存在を知ってもらうところから始める必要があると思います。例えば、大学のホールに雑誌のチラシを置き、「購読を希望する人には、3 ヶ月間雑誌を無料で差し上げます。」などと書いておく。

高島：今はチラシが安く出来るんで、大量印刷して、興味を持ってくれそうな人達に渡すと効果的かもしれませんね、

湯浅：バックナンバーなどもサンプルとして配布することで、活用出来ると思います。

高橋：私はそんなに広げなくとも、売れなくとも、自分達の好きなことを書いていればよいと考えますが。

小西：私は、自分の行為の一環として広げる努力をしてみたいと思っています。

中島：『音楽の世界』でお金儲けは出来ませんが、我々が発信したものを、もっと多くの人に読んでもらいたいし、また読者の声も聞いてみたいと考えています。私自身、日々の編集作業に追われてしまい、そういう面での努力が足りないと反省しています。

高島：私はこういう雑誌を 50 年月刊誌として発行し続けたことは、文化的に誇っていいことと自負しております。なんとか『音楽の世界』を継続して発行できる運営

を頑張って続けたいと考えています。そのために編集部だけではなく、会員そして関係者の方々に知恵と力を提供していただきたいと願っています。

橘川：会員の皆さんは『音楽の世界』につてどのように考えているのでしょうか。高島さんのように、この雑誌に対して誇りを感じて下さっているのでしょうか。

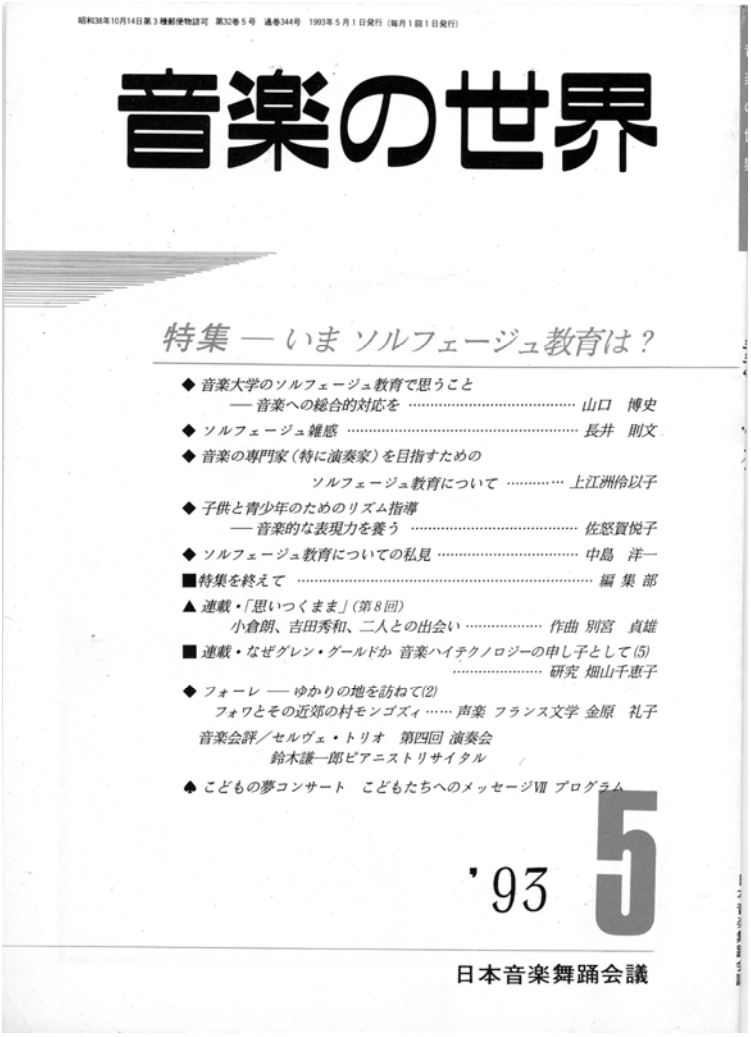
高島：会員や読者の素直な声を聞きたいですね。

湯浅：アンケートなどを実施して、意見を聞くとか。

中島：エコーなどにアンケート用紙を同封しても、なかなか回答は集まらないでしょう。

橘川：この号を発行した後、みなさんの意見を聞いてみるのも良いかと思います。
聞く方法は、アンケート用紙を配るだけでなく、電話とか、メールとか、色々方法はあると思います。

中島：いま、会員読者の反応について語り合っていますが、12月号で助川代表理事が最近は論争が少なくなったと書いていますね。例えばちょっと昔の話しですが「ソルフェージュ特集」に対して読者からの投書が続き、誌上論争に発展したことがありましたが、最近はそういうことがなくなった。


昭和38年10月14日第3種郵便物認可　第32巻5号　通巻344号　1993年5月1日発行（毎月1回1日発行）

音楽の世界

特集 ― いま ソルフェージュ教育は？

◆ 音楽大学のソルフェージュ教育で思うこと
― 音楽への総合的対応を …… 山口　博史
◆ ソルフェージュ雑感 …… 長井　則文
◆ 音楽の専門家（特に演奏家）を目指すための
ソルフェージュ教育について …… 上江洲伶以子
◆ 子供と青少年のためのリズム指導
― 音楽的な表現力を養う …… 佐怒賀悦子
◆ ソルフェージュ教育についての私見 …… 中島　洋一
■ 特集を終えて …… 編集部
▲ 連載・「思いつくまま」（第8回）
小倉朗、吉田秀和、二人との出会い …… 作曲 別宮　貞雄
■ 連載・なぜグレン・グールドか 音楽ハイテクノロジーの申し子として(5)
…… 研究 畑山千恵子
◆ フォーレ ― ゆかりの地を訪ねて(2)
フォワとその近郊の村モンゴズィ …… 声楽 フランス文学 金原　礼子
音楽会評／セルヴェ・トリオ　第四回 演奏会
鈴木謙一郎ピアニストリサイタル
♠ こどもの夢コンサート　こどもたちへのメッセージⅦ プログラム

'93 5

日本音楽舞踊会議

B5 版時代の『音楽の世界』表紙（1993 年 5 月号）

橘川：今の若い人についていうと、論争よりも共感を強く求めるように変わって来ていると思います。インターネットが若い頃から生活の一部に在り、個を発信できるソーシャルメディアを使いこなす若い人たちは、手段や作業風景だけを見ますと極度の個人主義のように見えますけど、実はそのネットの中で互いの発言や感情動向に非常に敏感に反応しています。フェイスブックやツイッター、多くのＳＮＳなどをみても、共感を示す「イイネ！」や発言を拡散する「リツイート」ボタンなど、共感の

表明方法がそもそもシステムとして制作者側から売り込みポイントとして設定・確立されているくらいです。

中島：今の若い人は孤独なのかもしれませんね。だから自分と気持ちを分かち合える仲間を求めている。自分が共感出来ることに出逢うと、一生懸命没入する。そういう場はボランティア活動、音楽イベントなど色々あるでしょうが。

橘川：そうですね。バブル崩壊以降２０数年、皆で大きな時流に乗る事もなく、その間に個人単位で発信・完結可能な環境が整い、気がついたら時代の閉塞感の中で孤独を通り越してそれぞれ孤立しはじめてしまった。だからこそ渇きにも似た、切実に共感を求める気持ちが特に強く育ってきたという面もあるのではないでしょうか。

　こういった渇きや共感を含め、今、創刊から５１年目のこの雑誌に、我々のこの時代・この世代の感性を、時代の証言として残したい。そのために多くの読者や書き手の心から聴き出し、ぜひ記し続けてみたいと私は願っているのですが・・・。

高島：なかなか難しいことかもしれませんが、50 年続いた雑誌だから、10 年後、20 年後に続いていて欲しいですね。

橘川：そうですね。ずっと後の人のために今の人の声を残しておきたい。

高橋：周囲の人間にこの会への入会を薦めても、昔のこの会のイメージが強く残っており、嫌がって入ってくれない。50 年経ったのだから、思い切って別の会にかえてみたら、という考え方も出来る。

中島：そういう考え方もあるでしょうが、私は過去の歴史を知り、それを克服して行ってこそ、新しい未来が開けると思います。過去に拘っていては未来が開けませんが、過去から逃避しても力強い未来は開けないような気がします。

小西：私は入会してからまだ日が浅いのですが、会と雑誌を自分を開発してくれる場として活用したいと思いますし、そういう視点に立って、仲間を誘ってみたいと考えています。

中島：２時間１１分経ちました。みなさん、長時間どうもありがとうございました。

（2012 年 12 月 2 日　14:15～16:30　高田馬場　日本音楽舞踊会議事務所にて収録）

リレー連載　未来の音楽人へ（1）

ピアノ　深沢　亮子

私は1938年6月22日、千葉県東金市にて大野桂、敏子の長女として生を受けた。下に3才ずつ年の違う弟が2人いたが、すぐ下の弟は残念ながら31才の若さでこの世を去った。又、父方の祖父は祖母（詩人、小説家、中勘助の妹）亡きあと私達と一緒に東金の家で暮らしていた。

七五三の時　左：亮子(7才)、中：弟(3才)
右：従姉妹(5才)

縁あって父が東金の母の元へ婿入りした時は、ヤマハのアップライトピアノを持参した。当時としては珍しかった様で、近所の人達が次々とピアノを見に来たという。この楽器との出会いが私の音楽家としての一生を決めることになった。ピアノがなかったら私は別の人生を歩んでいたかもしれない、と考えると不思議な気がする。私が幼稚園に入る頃第2次世界大戦が始まり、終戦になったのは小学校1年生の時だった。幼かったので余り良くは覚えていないが、夜中に警戒警報が鳴ると皆で庭先の防空壕へ入ったり、又、よく夕方、兵隊さんや東京から疎開して来た女学生達がお風呂をもらいに来、「亮子ちゃん、ピアノ聴かせてよ」。と云われて弾いたりしたことを覚えている。戦時中、そして戦後は物資や食べる物も少なく、家族で庭や郊外に借りた土地で野菜を作ったりした。母は独創性に富んだ人で、家にある物で家族の栄養を考え、又、私たちの洋服等も自ら縫ってくれた。私に、よそから頂いたパラシュートの残り布や紺の風呂敷等で、キリッとした可愛らしい洋服を夜中に作り、翌朝出来上がっていたことが度々あり、驚き、又嬉しかった。大層忙しい毎日だったが、母は絶えず読書をし、短歌を作り、時々日本画を描いていた。又、自分のことよりも他の人の心を思いやる優しい性格だったので、多くの人々から慕われ尊敬されていた。その母が59才の時くも膜下出血で突然亡くなったのは悲しい出来事だった。

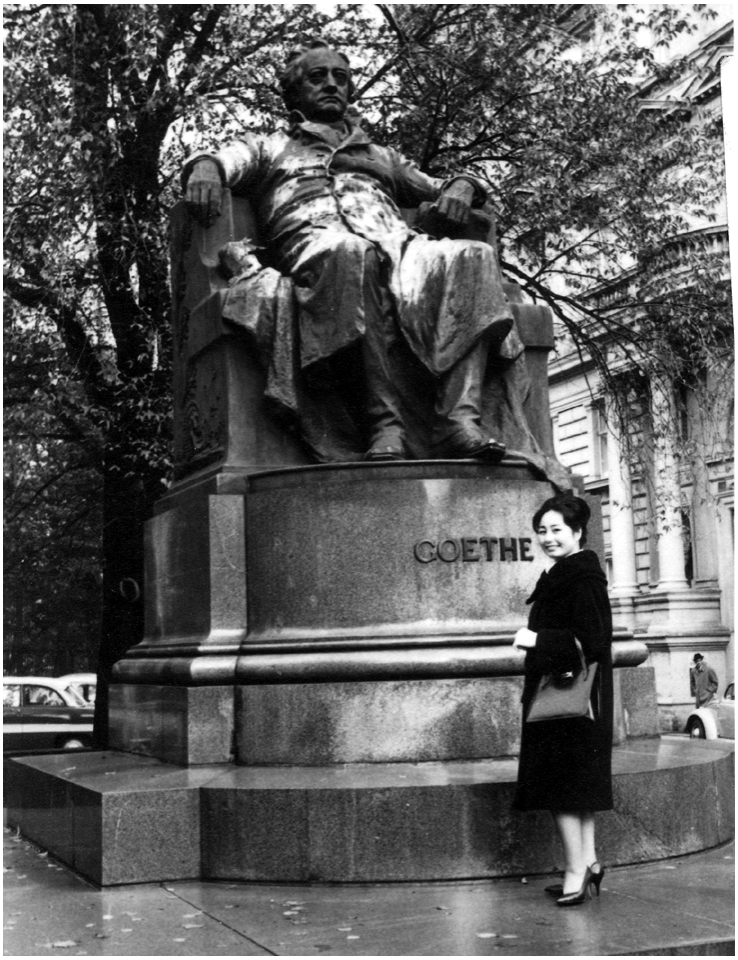
父は終戦前親戚に頼まれて軍需工場の工場長をしていたが、それが閉鎖されることになり、借金取りが来たりし、随分苦労をしたらしい、その後数年経ち、専門の心理学に戻り、千葉県の児童相談所や大学での講義が始まり父は自分を取り戻した様だった。それでも世の中は混沌とした時代が続いたが、そういう時だからこそと両親や多くの方々が戦争で失った精神的なものをとり戻そうと情熱を傾けて日々を暮していた。

私は3才位から両親よりピアノの手ほどきを受けた。母が父のフルートの伴奏をしたり（父は10才の頃からピアノとフルートを立派な先生方にお習いしていた）友人のお子さん達をお頼まれしてレッスンをしたり、音楽好きの親戚や知人が家に集まりホーム・コンサートをしたりし、ごく自然な温かい音楽的雰囲気があった。父は、すぐ上の姉と上野の音楽学校（今の東京芸術大学）の同級生でいらした永井進先生に数年師事し、先生に対して畏敬の念を抱いていた。私を生徒にとって頂きたかったのだが、ようやく4年生から正式にお弟子にして下さった。

NHK第4スタジオ放送の折に1955年11月コンクール入賞後すぐ、「少女の友」新年号掲載写真

小学校1年の弟も音楽が好きで、先生の奥様の美恵子先生にヴァイオリンを教えて頂くことになり、2人で毎週日曜日、早朝の汽車で片道3時間もかかる目白のお宅までレッスンに伺った。父の教え方も厳しかったが、永井先生は更に厳格で、子供だからと甘やかすことはなさらなかった。当時は田村宏、松浦豊明、大町陽一郎、小林道夫さん達の諸先輩が永井先生の所へいらしていた。父が亡くなる前「亮子は小さい時からよく頑張ったね」。としみじみ云っていたが、今考えると永井先生も父も音楽の素晴らしさ、厳しさ、それに基礎をしっかり教えて下さったので本当に有難かった。6年生の時、先生のお勧めで学生音楽コンクールを受け全国1位を頂

き、中学３年生で毎日の音楽コンクール（今の日本音楽コンクール）を受けたが思いがけなく首位を受賞、少しずつ将来はピアニストになって沢山の曲を勉強したい、という気持ちが出て来た。それにしても大人のコンクールは１次、２次、本選と課題曲が多く、夏休みは7、8時間も練習した。お陰で自分でも大分力がついて来た様に思えた。本選の２日前に右手５指がひょうそうになり手術を受け、余りに痛むので出場をあきらめるつもりだったのが、先生に「死んでもやれ！」とどなられて発奮し、当日はすべてを忘れて日比谷公会堂のステージで弾いたことは、忘れ難い思い出である。



ゲーテの像の前で　リング通り　1961～2年頃

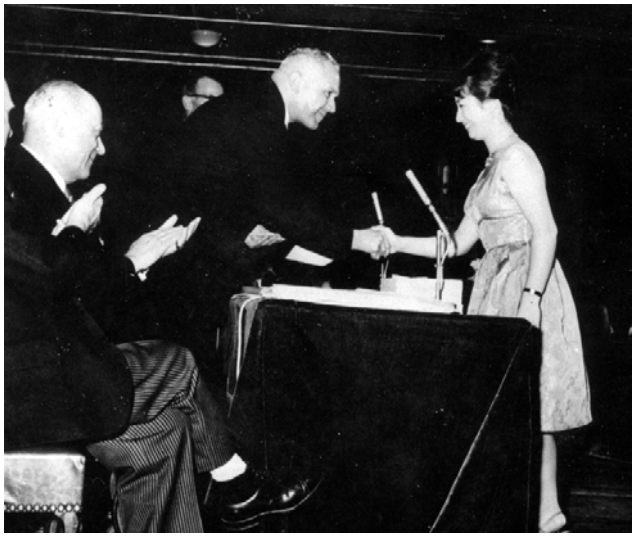
翌年の春にはコンクール入賞のご褒美に初めて東京交響楽団、上田仁先生指揮でWeberの「コンツェルトシュテュッケ」を演奏。初夏にはヤマハホールでデビュー・リサイタルをした。その年から芸大に附属高校が出来、お友達が受けることを聞いたので、永井先生に私の希望をお伝えした。先生はその大学、高校で教えていらしたのにも拘わらず「君はのびのびした子だから地元の高校へ行った方が良いよ」。とおっしゃった。先生は私の本質を見抜いていらしたのだろう。コンクール後は大急ぎで受験勉強をし、県立東金高校へ入学が決まった。昔は女学校で、祖母も母もそこで学び、4年前（2008年）に100周年を迎えた。高校生活も楽しかったが、両親も私も段々と次の夢の実現を考えていた。ウィーンへの留学である。はじめ私はフランスに憧れていたが、多くの方々のアドヴァイスに従いウィーンへ行くことを決め、ドイツ語の勉強を始めた。週３回、放課後に電車で東京の語学学校に通い、日曜日は永井先生のレッスンを受け、帰りに下落合の和声の先生の所へ永井先生のご紹介で伺うという、非常な忙しさだったが、若さとはっきりとした目標があり、又、健康にも恵

まれていたからこそ出来たのだと思う。幸い、文部省と外務省が年1回行う留学生試験にパスし、1956年2月、高校2年の終りに親元を離れウィーンへ旅立った。その頃の飛行機は南廻りしかなく、何と40時間近くもかかって彼地に着いた。そして知人より紹介されて6区に住む未亡人のフーバー夫人の所へ下宿することになった。ウィーンは連日－25℃の寒さだったが、同じグンペードルファーにお住まいの声楽家、佐々木成子先生や、亡くなられた大賀典雄氏他多くの方々がご親切にして下さった。国立音楽大学の入学試験では6年制の学校の4年に編入が決まり、G.ヒンターホーファー先生の元でレッスンが始まった。又、音楽史、アナリューゼ、楽器論、和声学他いくつもの学校の授業も受けることになった。

楽友協会のホールでチャイコフスキーの協奏曲を弾く（1961年頃）

フーバー夫人のことを私はムッティー（お母さん）と呼んだ。彼女も親身になって私の世話をしてくれた。街の1区は戦災を受けたままの建物が多かったが、次第に再建し、きれいになった。国立オペラ劇場も多くの市民や音楽家達の手により復興し、1955年11月5日、K.ベームの指揮により「フィデリオ」で幕開けとなった。6月は音楽祭のシーズンで、連日B.ヴァルターや大ピアニストのW.バックハウス他世界の巨匠達の素晴らしい演奏を楽友協会黄金の間で聴き深く感動した。数年後、私もN.Ö.トーンキュンストラー管弦楽団の定期公演（各公演は楽友協会で3回、あと1回は郊外のどこかの町で行われた）に5年も続けてソリストに選ばれ、まばゆいばかりに美しく響きの良いホールで、MozartやMendelssohn 、Liszt、Tchaikovskyなどのコンツェルトを弾くことが出来たのは夢の様だった。このステージに私は楽友協会のコーラスの一員としても3年間度々立った。200年近くの歴史をもつ“ズィングフェライン”という合唱団だが、音楽大学のコーラスの時間にR.シュミット教授から勧められ、テストを受けて入団し、ウィーン・フィル、カラヤンやベーム、ミトロプーロス等の指揮、ソリストのF.ディスカウ他一流の歌手たちの傍でバッハの受難曲、ハイドンのオラトリオ、ブラームスのドイチェス・レクイエムから現代の作品まで歌うという貴重な体験を

した。卒業試験も無事に終り、ブラームス・ザールでデビューリサイタルをし、その後ジュネーヴの国際コンクールを受け入賞した。



ジュネーヴ国際コンクール１位無し２位受賞の時の写真（1961 年 9 月）

1962 年の春 6 年ぶりに帰国し、リサイタルを行い、各オーケストラの定期公演他日本中方々のコンサートに招かれた。その後再び演奏会の為ウィーンに滞在し、ヨーロッパ、北欧、東欧、南米、アジアの諸国で演奏した。各地で多くの人々との出会いがあり、さまざまな文化に触れる機会に恵まれ更に自国の秀れた伝統、文化を再認識したのだった。人は他者との比較に於いて今迄余り気がつかなかったことに気がついたり、相手を尊敬したり、いろいろ勉強になるものだ。日本のピアノ作品も国内のみならず、海外のリサイタルや放送で、向こうの人達にも日本の作品を知ってもらいたいと考え、助川敏弥、尾高尚忠、高田三郎、石井眞木の諸氏他の作品を常に紹介することを心がけた。

ウィーンの音楽大学では室内楽が必修科目になっており、よくその場で居合わせた学生と初見でハイドンのピアノ・トリオ等弾かされた。その頃ウィーン・フィルの重要なメンバーの方々とも親しくおつき合いする様になり、有名な八重奏団のヨーロッパや日本への演奏旅行に誘われて共演、彼等とのアンサンブルを通じて実に多くを学んだ。他にもウィーン室内アンサンブル、シュトイデ弦楽四重奏団、ブリュッセル弦楽四重奏団他、何度か声をかけて頂き室内楽のレパートリーも拡がって行った。日本の優秀な方々との共演も多く、毎年 5、6 曲ずつは新しく勉強している。弦や管との室内楽はピアノのみ弾いているだけでは得られない楽しさがある。皆

バックハウス（左）80 才誕生日の折に

で音楽を作り上げる作業、各々優れた才能を持ち乍ら全体が大きな世界へと拡がってゆく所に大きな魅力があり、自分自身の為にも得ることが多い。（音の出し方、微妙な Tempo の揺れ、息遣い、フレーズ感、臨機応変さ、etc…）

潮田益子さん（中：Vl.）、徳永建一郎さん（右：Vc）と私　　1966 年

1967 年、私は深沢朝幸と結婚。彼は物事の本質を見極めることのできるセンスのよい人だった。長い間には身内の者達、親しい人々との永遠の別れが度々あり、深い悲しみを味わったが、いつも音楽が私の傍にあり、又多くの方々が支えて下さった。音楽は人と人との心を結び、勇気や優しさを与えてくれる。素直で謙虚、そして常に感謝の気持ちを忘れずに、今後も残された人生の中で自分を深めてゆきたいと思う。又素晴らしいものとの出会いを大切にし、新鮮な気持ちを持ち続けたいと願っている。若い方々も、音楽のみならず他の分野、例えば美術や文学等にも興味を持ち、幅広い考えと行動力を身につけ、好きな事をとことんやり遂げる様努力して頂きたいと思う。それによって日本の将来も明るいものとなってゆくだろう。やや音楽とはずれたことにも話が言及したが、何かこの文章からご参考になる様なことがあったら望外の幸せである。

（ふかさわ・りょうこ　本会代表理事）

写真左
ザルツブルク：モーツァルトが魔笛を書いた小屋を背景に
1965 年夏　N 響の方々と

連載　音・雑記－ひなの里通信（54）　狭間 壮

―― 閉校そして140年の歴史を閉じる時 ――

明治5年、日本の近代学校制度の法令「学制」の公布により、全国に小学校が誕生する。それは、尋常小学校、国民学校と呼称を変えながら、140年の歴史を刻んできた。

しかし、近年の少子化の影響で、小学校や中学校の統廃合がすすめられている。ここ信州松本も例外ではない。8年前に松本市と合併した四賀（しが）村（地域）では、この春、4校が1校に再編成される。

そのうちの1校の閉校式で記念講演（歌つきのお話）をたのまれた。対象は、小学生とその親、卒業生、地域住民、教職員というもの。

その内容の一部を再現記録してみました。こんな風です。おつきあいください。

こんにちは。きょうは錦部（にしきべ）小学校の閉校式。140年の学校の歴史を閉じる大事な式典にお招きいただき光栄です。30年前に一度、PTA講演会で参りましたが、その時の小学生は、36歳から42歳ぐらい、社会人として立派に活躍されています。ご父兄としてきょう、参加されているかもしれませんね。

140年前というと、チョンマゲの江戸から明治になって、5年です。みなさんの錦部小学校は、そんなころに開校したのです。スゴイですね。きょうは、そんな歴史をたどりお話をすすめます。

日本はアメリカやヨーロッパをお手本にして、近代国家を目指し、追いつき追いこせの目標を立てました。音楽も美術もその大事な教育の一つとして、欧米にならい教えることにしたのです。みなさんの先輩は、どんな歌を勉強したのでしょう？実は、まだその準備が出来ていませんでした。「当分之を欠く」ということで、10年すこしたってから、唱歌教育が始りました。どんな歌が？

たとえば「蝶々」です。今でも歌われていますが、メロディーを外国の歌にかりて、歌詞が作られました。歌います。

あれ？と思いましたか？2番に「スズメ」が出てきました。「起きよ　起きよねぐらのスズメ・・・」と、いつの間にか蝶々がスズメに！朝ねぼうはダメの教えです。子どもは、こうあってほしいの願いや教えを歌にこめました。

次は「金太郎」！これは強いお侍、坂田の金時がモデル。気は優しくて力持ち、将来は出世して立派な人に、ということで。歌詞も曲も日本製です。また、中学唱歌では、「荒城の月」が歌われました。これも日本人の作詞、作曲です。そして、この歌は外国で紹介される事も多い日本を代表する歌になりました。歌います。（この後、「埴生の宿」を歌い、話をすすめて・・・）

ところで、このごろ、寒くなって灯油の販売車がやってきます。このあたりではどうですか？スピーカーでコマーシャルソングを流しながら、そのコマーシャルソングが「雪」です。これも文部省唱歌。雪よ来い来いって歌います。さあ、“雪やこんこ”、みんなで歌ってみましょう。（会場一杯で歌い終る）

さて、錦部小学校の140年のうち、半分ぐらいの年月にわたり、日本は戦争を

経験することになります。日清、日露、第1次、第2次世界大戦です。ここ錦部地区からも、先輩がたくさん戦争に行きました。日露、特に第2次世界大戦では、多くの犠牲者を出しました。

戦争が日常的になり、唱歌の中にも戦争がしのびよってきます。静かにあたりまえのように・・・「冬の夜」、外は吹雪になりました。歌います。

2番の歌詞がちょっと違うな、と思われたかもしれません。実は私が歌ったのが、最初の歌詞です。お父さんが、いろりばたで戦争の手柄話をするという内容です。この戦争は日露戦争がモデルにされています。戦後、1945年第2次世界大戦のあと、新しい憲法で、日本は戦争放棄を決めました。それでこの歌詞は今みなさんが歌っている昔の思い出を語る、という風に変えられました。

その当時は、この歌よりもさらに戦意が高揚するように、たくさん軍歌が作られ歌われました。一部は教科書にもとりあげられます。敵性音楽といって、アメリカの歌、英語などの言葉も禁止されました。今からでは信じられないことですが、日本中が戦争一色、「鬼畜米英！」と竹やりをもって。子どもは「戦争ごっこ」に夢中になります。（このあと、もう少し私自身の反戦の思いを語った。）

戦争が終って平和になりました。新しい子どもの歌が次々と誕生します。「夕方のお母さん」を歌います。ひよこ、めだか、こねこ、のお母さんが、「ごはんだよー！」と呼びます。お母さんになったつもりで、一緒に呼んでみましょう。ちょっと練習しますか、セーノ、「ごはんだよー！」。（笑い声も一杯に、ともに歌い終える。）

140年間を刻んだ思い出は、それぞれにあることでしょう。140歳の方、おられますか？さすがに・・・。今、その歴史のまっただ中で勉強している小学生のみなさん！、ご近所の大先輩に、昔の思い出など、聞いてみてください。歌は、「思い出のアルバム」です。

さて、140年の歴史は閉じられますが、これから統合される小学校で1から始る歴史を作り出すみなさんが、みんな幸せでありますようにの願いをこめて、「世界中の子どもたちが」を最後にみなさんと一緒に歌いたいと思います。

ありがとうございました。これで終ります。

ステージは1時間。他に寺子屋時代のわらべ歌や、「ちいさい秋みつけた」「北風小僧の寒太郎」なども歌った。140年の歴史を閉じることも、子どもにとれば昨日に続く今日、明日への日常、そして新しい統合への夢の始りということのようである。輝くような笑顔で！

そして、ノスタルジックな感慨にふけるのは、どうやら大人だけだったのかもしれない。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【イラスト】武田 光弘（たけだ　みつひろ）

名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 35 回〕　「夜想曲」の生みの親

クラシック好きな人には概してロマンチストが多い、といわれている。楽器だけによる抽象的な曲が多いため、あれこれと空想・想像して聴かなければならないからである。空想の中には、論理的なこと（形式がどうとか、展開がどうといったこと）も入ってくるかもしれないが、永くつき合い、楽しんで聴いている人には、美しさとか雰囲気、そこから想起される情景などの方が、むしろ魅力的。惹きつけられる要因になっているという人が多い。

そのロマンチストに好まれそうな楽曲に、「夜想曲」と題される曲があるのをご存知の方は多いと思う。これがどこから来たかを探ってみると、じつはあまり知られていない一人の埋もれた作曲家の名が浮かびあがってくる。今月は彼について、ちょっとご紹介してみよう。

まずは「夜想曲」について知っておかねばならないが、原題はノクターン（英語。フランス語ではノクチュルヌ）である。“夜に想う音楽”“もの想う夜の音楽”とは、文字からしていかにもロマンチック。うまい訳だと思うけれど、じつはいきなり生まれたものではなく、前身にあたる曲があった。モーツァルトらにある 19 世紀以前の「ノットゥルノ Notturno」あるいは「ナハトムジーク Nachtmusik」がそれで、セレナードやディヴェルティメント、カッサシオンなどとともに、貴族が宴会や食事をする際の実用娯楽音楽に属していた。ところが 19 世紀になると、これが家庭用・演奏会用の音楽へと変化し、フランス語のノクチュルヌ、英語のノクターンの名称が使われると同時に、もっぱら小規模なピアノ曲を指すようになったのである。内容的にはロマン主義文学の影響を受けて、抒情性の濃い夜の気分を感じさせるものへと変化。ロマンチック器楽曲の代表として広く愛されるようになった、というのがおおよその経緯である。

ジョン・フィールド（1782～1837）

そしてこの最初のピアノ曲を考え出した人物として登場するのが、この項で

の主人公、イギリスの作曲家ジョン・フィールド（1782～1837）なのである。

ピアノ曲で「夜想曲」というと、ショパンのそれが有名で彼が創始者のように思っている人が多いかと思うけれど、彼の曲の解説を読むと必ず名前が出てくるのが、じつはジョン・フィールド。ショパンはフィールドに刺激されて書いたわけである。

フィールドとは、どんな人物か。事典などから経歴を覗いてみると――アイルランドのダブリンに生まれ、早くからピアノを学んで、なんと10才でデビューしたとある。その後、「ソナチネ」で有名なクレメンティに師事し、彼とともにヨーロッパ各地で演奏会を開いて大成功を収めるとともに、作曲も行なって特に最初の「ピアノ・ソナタ作品1」で名声を決定的にしたという。1803年以降はロシアのペテルブルグに定住し、ここを中心に演奏や作曲を行なったり後進の指導に活躍したが、最後はモスクワで没している。

近年聴けるようになったピアノ協奏曲（全部で7曲ある）や、ソナタ（4曲）、ロンド（6曲）その他を聴くと、その作品は独特の抒情性と繊細さに加えて、技巧的にもかなりのもので、彼がいかに優れたピアニストであったかをほうふつとさせて、埋もれていたのがふしぎな気がする。一説によると彼がロシアへ渡ったのは、商売上手なクレメンティに乗せられて、ロシアでの販売拡大に利用されたということらしいが、酒好きだったといわれる彼のこと、もしかしたらウォッカのある生活が気に入って、終生抜け出せなくなったのかもしれない。

「夜想曲」という小品を彼が書くきっかけとなったのは、キリスト教カトリック教会の祈りにある「夜祷」を聞いていた時だったといわれるが、美しい旋律とそれに寄り添う陰影に富んだ伴奏とからなるそうした小品を、彼は全部で19曲ほど書いた。ショパンのそれに比べると、内容的な深さや洗練さでは一歩譲るものの、旋律や分散和音には独特のものがあり、これはこれでじつに魅力的である。わかりやすく喩えるなら、メンデルスゾーンの「無言歌」に似たのどかさ（ただし、弾き方によって、暗い演奏のCDもある）。それがフィールドの「夜想曲」だといえるかも知れない。ショパンと比べるつもりで、愛好家には絶対のお奨めである。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】

音盤奇譚

板倉 重雄

第 40 回

メンゲルベルクの二つの《悲愴》

往年のオランダの名指揮者、ウィレム・メンゲルベルク（1871～1951）はロマンティックな演奏ぶりで、戦前はトスカニーニ、フルトヴェングラーと並び称された巨匠だった。弱冠 24 歳でコンセルトヘボウ管の首席指揮者となり、以来 50 年間率いて同オケは完全に彼の楽器となった。R.シュトラウスはその演奏に驚嘆し、この名コンビに交響詩《英雄の生涯》を捧げている。大戦中のナチスとの関係で、戦後は楽壇を追放されたまま亡くなったが、戦前の SP に数多くの名盤を残している。その中で最も有名なのが 1937 年録音のチャイコフスキー《悲愴》である。戦前は《悲愴》の決定盤扱いされ、戦後も LP や CD に復刻され長く聴き継がれてきた。宇野功芳氏は FM fan 誌 1980 年 13 号で「あらゆる《悲愴》のレコードの中で最も甘美な演奏（略）録音は貧しいが、その現実ばなれのしたポルタメントとルバートは 19 世紀そのもの」と評している。

《悲愴》1937 年録音　OPK2011（CD）

私もメンゲルベルクの《悲愴》を学生時代に聴き、その古めかしい音と表現から響く、独特の甘い演奏に酔い痴れた口である。その後 90 年代に入って、メンゲルベルクにはもう一つの《悲愴》の録音があることが判った。1941 年録音の SP で、大戦中の混乱期のためドイツ以外で発売されなかったのだという。復刻盤も出たが、大差ないだろうと思って、今まできちんと聴いていなかった。

先日友人が 1941 年盤の SP を手に入れたので、共同主宰している SP コンサートにかけ、じっくり聴いてみた。驚いた。まず録音の鮮明さ。旧録音とたった 4 年の違いだが、断然清澄な響きであり、「メンゲルベルクの音」が少しも古臭くなく、実

《悲愴》1941 年録音　OPK7021～3（CD）

は非常に感覚的で美しいことが判った。そして演奏の一層の素晴らしさ。見栄を切るように聴こえた旧録音のルバートが、まったく天衣無縫に推移し、かつ形式も洗練されているのである。メンゲルベルクの《悲愴》を聴くなら 41 年盤に限る！これからはそう喧伝しなければならないと思った。

●チャイコフスキー：交響曲第 6 番《悲愴》、ヴィヴァルディ：合奏協奏曲 Op.3-8、バッハ：アリア（管弦楽組曲第 3 番より）

メンゲルベルク指揮コンセルトヘボウ。

［オーパス蔵　OPK2011（CD）］

1937 年録音。日本でも SP レコードとして発売され、LP、CD にも復刻されて聴き継がれてきた。長く「メンゲルベルクの悲愴」と言えば、この盤を指していた。

●チャイコフスキー：交響曲第 6 番《悲愴》、バッハ：マタイ受難曲

メンゲルベルク指揮コンセルトヘボウ。

［オーパス蔵　OPK7021～3（CD）］

1941 年録音。こちらの《悲愴》は、戦前ドイツでしか発売されなかったもの。強音でリミッターがかかるのは年代的にやむを得ないが、音質そのものは鮮明。演奏も一層練れている。1939 年ライヴのマタイ受難曲とのカップリング。この「マタイ」もロマンティックな様式によるバッハ演奏の最高峰として有名。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

私と、ラジオ・ドラマ

連載第７回　　作曲　助川 敏弥

「海の楽隊」

費用対効果ということを書いた。経済学的にいえば、私は費用対効果の角度からは途方もなく割りがあわない仕事ぶりをしていたわけである。しかし、それは別の効果を期待してのことであり、そちらの価値観からすれば充分以上に合理的なことであった。そのことも前回書いた。

誰しも、また、どの分野でも徹夜の仕事というものがあるだろう。寝ないで仕事をすることである。私もしばしば経験した。それでも、これは体力がある年代のことである。私が最後の徹夜をしたのは 38 歳の時だった。この年の確か 6 月くらいだったと思うが、実はこの年、それに先立つ 3 月のこと、私は二晩続きの徹夜をした。仕事は広報映画であった。日映新社という会社の仕事だった。日本列島を飛行機で南から北まで空から案内するというものだった。幾ら若い時でも、二晩の徹夜というのは後にも先にもこれが一回だったと思う。相当こたえる。頭が空白になったような状態なり、それでもともかく思考力だけは働くという極限的状態であった。どえらい経験をした。しかし、これから書く、次の、私にとって最後の徹夜は少し事情が違う。経済的費用対効果からいえば、これほど収支の均衡がとれない仕事はなかったろう。

NHK の学校放送の仕事だった。ラジオ番組で「お話玉手箱」という番組がある。いまでもあるかもしれない。15 分の短い番組だった。この番組は歴史が長く、私がかかわるはるか以前から存続しているものだそうで、そのことは後から聞いた。「しにせ」の番組である。この時の担当者は大井つや子さんというベテランだった。
大井さんの仕事はずいぶん頂いた。大井さんは経験の長い人で劇の仕上げ方も練達で、こういう人の仕事は甲斐があるし、話が分り、やりやすい。

その番組は、「海の楽隊」という話だった。童話である。誰の原作か忘れたが、かなり知られているものらしい。私のあとで、かなりの後に、またとりあげられていたのを聞いた。
話というのは、ある大きな客船が航海中に海上で嵐にあった。その時、魚たちが船の周りに集まり、下から持ち上げ、船を救う、という筋書きである。話としては他愛のない話で詳しい細部はもう忘れた。
話の頂点は魚たちが音楽を奏で、それが次第に大きなアンサンブルになり高揚する場面である。これはとりようにより童話的場面にすぎないのだが、私はここで恐ろしくおおげさに解釈したのである。自然の生命が集団化してその巨大な意図が音楽化されるという交響的場面を想定してしまったのである。そう考えれば、これは限りなく劇的で壮大な場面になる。いったんこう考えてしまうと、音楽の方も際限なく壮大雄大なものになるし、そうしなければならない。私は、絃の数を増やし、それを幾つにも分割、divisi にして、音を多重化する壮大な和音を構築することを

意図した。三度構成の和音の積み重ねの数を増やし、高層的な多重和音を構成するのである。しかも、はじめは単純な和音で始まり、次第に多層化してやがて壮大な自然の交響が鳴り響くというイメージを画いてしまった。こういう構想を立ててしまうと途中でいい加減な妥協ですませることはできない。音の構成の推移を慎重に考え、構造の推移を考え、その時間的発展をまた考えなければならない。際限なく考える範囲がひろがってしまった。こういう時は、仕事を広げすぎたかな、という懐疑が途中で湧いてくるものだが、乗りかかった舟で途中から引き返すことはできない。メシアンかオネゲルか、はたまたショスタコーヴィッチのある種の曲か、そんなどえらいものに取り掛かってしまった。この頃私はすでに練達の技術をものにしていたので、腕がわるくて時間がかかってしまったというわけではない。技術の方は申し分なく持っていた。時間の上でも追い詰められて無理したというわけでは決してない。ただ、構想を余りに大風呂敷にしてしまったのである。その結果が寝る時間がないという結果になってしまった。

録音の結果は上々で制作者にも評判よく徹夜の甲斐は充分あり、自分でも意図したことを実現した満足感はあった。ただ、練達ということから言えば、経済的な意味での費用対効果とは別に、この話の内容に対して、これだけ複雑雄大な音楽が劇作として適切であったかどうか、その疑問はかすかにあった。もっと比喩的象徴的な軽い音楽づけがあり得たのではないか。自分流の費用対効果の意図の結果で、劇本来の演出と仕上げからは余りに「壮大」な音楽は、むしろ不適切、とまでは考えなかったが、別な対応もあったのではないか、そういう懐疑も確かにあった。むきになって大がかりなものに走ることはやはり勇み足で未熟なことだったかもしれない。

後日、同じ童話を別な作曲家が担当したのをたまたま聞いた。確か、斉藤高順さんだったように記憶する。斉藤さんは、この場面で、軽い、ルンバかボサノバのような音楽に仕立てていた。私は、かねてからの懐疑への答えを聞いたように思った。これでもいい、あるいは、この方がいい、とすらいえるかもしれない。私の仕事ぶりは、費用対効果を無視して、別な意味で自分なりの費用対効果を意図する、はっきり言えば、自分のエゴイズムを通したのである。それが私の仕事に対する価値観であり、すべて承知の上のことだったから失敗とは思っていないし、あれでよいと思っているが、こういう仕事ぶりはこれが頂点だったように思う。

私の方法は、これ以後、心理表現的なものに変っていった。大規模な編成をとることなく、均整のとれた規模の編成で人の心の動きを微妙に表す暗示的な音楽に変っていったのである。いわばオトナの音楽になっていった。そのため、しばしば特殊な音色の楽器を使うことがあった。プリペアド・ピアノ、あるいは、ミュージカル・ソウ、音楽のこぎりである。あるいはオカリナ、こんな楽器も使った。それぞれ特異な状況の人の心と雰囲気、情景と背景の造映に貢献するものだった。もっとも、内容がそういう種類のものが依頼で来るようになったこともある。

（すけがわ・としや　本会　代表理事）

コンサート評

ピアノと室内楽の夕べ

日本音楽舞踊会議　創立 50 周年記念

評論　浅岡 弘和

創立五十周年を迎えた日本音楽舞踊会議の主催による師走の恒例行事である室内楽コンサートが今年も開催された。今回も日本クラシック音楽界の重鎮深澤亮子、恵藤久美子、安田謙一郎のピアノトリオをメインにバラエティに富んだ演目が並べられた。

前半はまず深澤のピアノソロにより十八番のシューベルトが３曲弾かれた。十二のワルツから第２番ロ長調＆第６番ロ短調、そして作品１４２の四つの即興曲から第２番変イ長調が採り上げられたが、楽しい若書きの小品から諦観の念を感じさせる晩年の作品まで、ウィーン所縁の大作曲家の音楽をライフワークとする深澤だけに完全に自家薬籠中のものになっていた。

次は恵藤と深澤のデュオにより、ブラームスのヴァイオリンソナタ第１番ト長調「雨の歌」が演奏された。現在３曲残されているブラームスのヴァイオリンソナタは全て彼の中年期以降の作品であり、そのせいかかつて朝比奈隆がブラームスについて語った言葉「年をとった男には心の中の宝のようになってくる、ある感情」で満たされているように思われるが、やはり二人のベテランによる名演は第１楽章からしてブラームスらしく決して華美にならず、あくまでも内面的な感情を優先的に描き抜く。ピアノがメロディーでヴァイオリンは下で支える個所が多いだけに、親密で室内楽的な要素もたっぷりあり、第２楽章では中間部が葬送行進曲のような悲劇の大伽藍を構築。疾走するかなしみのようなフィナーレもピアニスト共々、実に流麗に歌い抜いた。

ブラームスのソナタを演奏する恵藤久美子と深沢亮子

後半はまず安田と深澤のデュオにより、助川敏弥の新作であるチェロとピアノのための"Sunset"が作曲者臨席の下に初演されたが、この作は助川がある日、垣間見た死後の世界を音楽化したものだという。死への畏れというより懐かしさ、憧憬を強く感じさせる助川ならではの親しみやすい佳曲。

最後はモーツァルトのピアノ三重奏曲第五番ホ長調Ｋ５４２が採り上げられた。ベートーヴェンやシューベルトに比べるとモーツアルトのピアノ三重奏曲はピアノ四重奏と違って、今一つなものが多いような気もするが、さすが名手が三人揃うとその洒落た愉悦といい、滅多に聴けぬ高雅な名演が展開された。３人の息もピタリ合い、場内にはアットホームな雰囲気が醸し出されていたが、アンコールには第２楽章がもう一度演奏された。（12 月４日、音楽の友ホール）

（あさおか・ひろかず　音楽評論）

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

【2012 年 12 月号の訂正】

◆17 ページ右の写真の説明

左：副議長の島田美佐子氏【誤】→　左：副議長の<u>嶋田</u>美佐子氏【正】

◆19 ページの写真の説明

右から故寺原伸夫氏、故小平一郎氏　【誤】→　右から故寺原伸夫氏、故<u>小平時之助氏</u>【正】

読者の皆様および嶋田美佐子さん、故小平時之助の親族の方々にお詫び申しあげます。

安曇野より北アルプス後立山連峰を望む

電子キ楽器レポート・連載 - 2

電子オルガン音楽のオリンピック
「２０１２広州国際電子キーボードアーツフェスティバル」と「中国音楽大学電子オルガン発展シンポジウム」

研究　阿方　俊

オリンピックといえば、世界中の人々が集うスポーツの華やかな祭典だ。まさに電子オルガン音楽におけるオリンピックと呼ぶのにふさわしい催しが 11 月 19～23 日、中国南部の最高音楽教育機関である星海音楽学院で行われた。「広州国際電子キーボードアーツフェスティバル」と「中国音楽大学電子オルガン発展シンポジウム」である。この催しに対する 2 つのテーマ設定の意味は、国際フェスティバルとしての多様性と同時に大学行事としての学究的質の高さを求めたものである。

開会式当日、メイン会場であるホールに着くと、ホール入口にはゲスト講演者の数倍の大きな顔写真や主要な催し物の大きなパネルに迎えられ、ロビーに入ると吹き抜けの天井から 60 数ヵ国の万国旗が下がっていて、国際フェスティバルとしての華やかなムードをいやが上にも漂わせていた。

ホール入口のゲスト講演者の顔写真

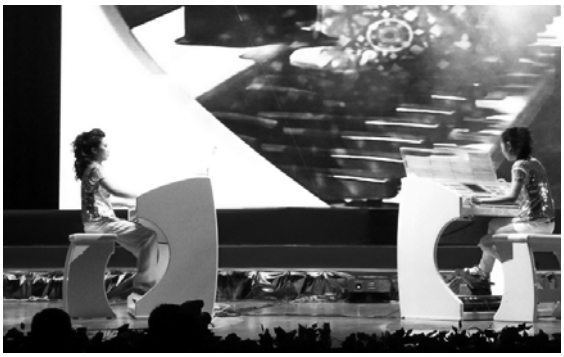
ホールロビー内の万国旗

大会には中国を中心に日本、台湾、ベトナム、アメリカの 5 ヵ国から電子オルガン奏者、教師など専門家が 200 名、学生が 250 名程度参加し、コンサート入場者は 4,000 名前後を数えた。また後援団体として音楽大学・学校が 52 校、関連学会や協会が 25 団体という多くの教育機関が名前を連ねていたのも特筆すべきことである。スケジュールは、朝 9 時から夜 9 時までの長丁場で次のものが行われた。

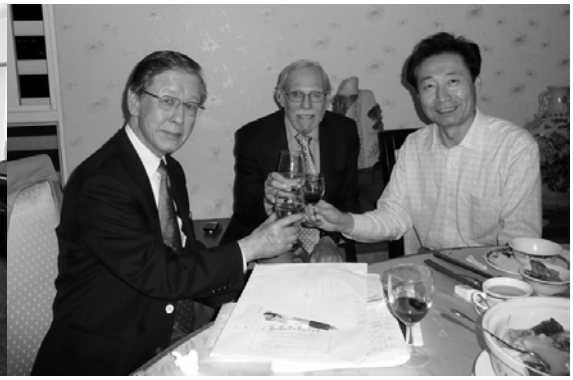
１．学術講座×8（中国×3、日本×3、台湾×1、アメリカ×1）
２．学術報告×8（中国×7、ベトナム×1）
＊ 学術講座と学術報告の基本的違いはなく、発表時間の相違
３．公開講座×3（日本×3、クラシック電子オルガン、電子オルガン、 ハイブリッドオーケストラ）
４．論文発表×21（中国×24）

５．研究成果発表×7（中国×7）
　　＊ 論文発表は選ばれた代表が、また成果発表は数室に分かれて行われた
６．会議×3（音楽大学電子オルガン情報交流会、中国電子オルガン学会情報交流会
　　アジア・パシフィック電子キーボード協会 APEKA 会議）
７．ヤマハ電子オルガン教師クラブ YETC 年会×1
８．コンサート×7（開会式演奏会・星海音楽学院、吟飛、ローランド、ヤマハ、クラシックオルガン、音楽大学選抜者 12 名、閉幕式演奏会）
９．ハイブリッドオーケストラ見学（分奏を含む）

朝から夜まで行われる行事に全て参加することは体力的にもかなりのエネルギーがいる。また、同時進行のものが多々あるので選んで参加した。中でも日本人として興味をもたされたのは、中国製の電子オルガン、吟飛（インフェイ）社製の Ringway コンサート。上下鍵盤 5 オクターブ、ペダル鍵盤 2 オクターブの RS1000 という大型機種が使用されていた。曲目は、エルガーの威風堂々やジョン・ウィリアムスのジュラシック・パークといった電子オルガンコンサートでよく耳にするものに加え、中国人作曲家の鮑元愷の作品など中国の曲が半分近くあったのが印象的であった。また写真上のように映像とのコラボレーションも目を引いた。



APEKA ミーティング in 広州



左から：筆者、R.グレイソン、雷光輝

電子オルガンは、他の電気製品と同様に企業主導の下で進化・発展してきており、企業間を横断して物を考えることはあまりなかった。しかし、今回のように多くの人が一堂に会した熱気あふれる演奏や発表・討論は、中国の経済にも劣らないエネルギーを感じることができた。打ち上げの席上、このフェスティバルを主催した星海音楽学院の雷光輝副院長が、この出会いをきっかけに国際交流の輪を一層広めて行きたいと発言され、近い将来の再開を約束したことが思い出される。

（あがた・しゅん　本会研究会員）

福島日記（16）　作曲　小西 徹郎

　年が明けた。昨年１２月、学生は後期試験だった。学生たちは入学してきてから将来への不安と向き合っている。若い頃、学生時代はまだ見えぬ将来、就職、プロフェッショナルへの道、ここに大きな不安があるのはいたしかたない。彼らは目を開くことに対しとても大きな恐れを持っていて現実を見ていくことが自己否定になることを大きく恐れている。本当に業界就職できるのだろうか？自分は本当にプロフェッショナルとして生きていけるのだろうか？本来は常に一歩を踏み出していくことでしか自分自身の道を見つけることはできないのだがそこを避けてしまいがちである。

　では私はどうだったか？彼らと同じ世代の頃、私は彼らと同じく大きな不安を持っていた。私は音楽大学ではなく一般の経済大学であったため音楽業界にはどうしても遠いと感じていた。就職活動もとても怖くいつも足がすくんでいた。学生時代はもう残りわずかなのか、と思うととても悲しかったし次のステップへとなかなか踏み出せなかった。私だって今の彼らと同じだったのだ。ただ、ひとつ言えることは、前に進むしか生きることができない、という意識だけはあった。これは皆学生から社会人になるときに芽生えるものである。私は結局音楽業界ではなく流通業界に就職してしまった。このことは当時の私にとっては大きな汚点となった。だがその１３年後、会社を退職し音楽、アートの世界に多くを捨てて飛び込んだときに思った。会社員時代の経験は今の私の土台のひとつになっていると。会社員時代がなければ今現在の視点を持ち合わせることができなかっただろうし仕事として音楽やアートをしていくことはできなかったであろう。芸術には社会性が非常に重要なのだ。そのことに気がついたのは３８歳のときだった。完全なる私見だが、学生時代は現実逃避をしたがるものだ。そのために何か理由をつけたがる。そして言い諭しても「それはよくわかってる”けど”」と言うのだ。”けど”という言葉は「私はあなたの言うことを何も理解していません」と言っているのと同じである。話を聞いていて本当に「理解」しているのであるならばその話を何時間でも耳を傾けていられるはずなのだ。だからそこには「面倒臭さ」や「現実逃避」があるのだ。そして、本当に忘れ

てはならないのは今躊躇しているその足元には常に原発事故の影響がつきまとっている、という現実。今の若者は社会に出ること、今までとは異なる真逆の世界に行かなくてはならない恐怖、そして将来の健康不安や地元福島の放射能汚染についても常にその恐怖と向き合ってきかなくてはならない。本来、考える必要のないことまでも考えて生きていかなくてはならないのだ。そのことについては私は不憫に思えてならない。郡山駅前のモニタリングポストの数値は０．２６９マイクロシーベルト/毎時、学校がある方のモニタリングポストは除染前は１マイクロシーベルト/毎時、もあったのだ。(現在は０．５マイクロシーベルト/毎時程度で推移している)この現実は常に福島の人々についてまわる問題なのだ。

Wasabi の学生、江田昇が作ったＣＭ映像をみた。彼は常に必死である。何事からも逃げずすべて体当たりで突き進んできた。だから私や小島先生の厳しい指導にもとことんついてきて常に共にいる。彼は自分の意見をきちんと持ちながらもとても謙虚で自己犠牲型の性格をしている。そんな彼の作った、映像を専門として学んだことのない彼が作った Wasabi のＣＭ映像をみて私は指導方法に間違いはないと確信した。何故ならその映像作品は非常にエッジが効いていて極めてクオリティの高い作品だったからだ。もう一度言う、彼はドラムを中心に演奏をするアーティストになりたくて入学してきた学生だ。だが、謙虚に視野を広く持つことによって迫力ある映像作品を作れる２１歳の青年となったのだ。ここまでやれる学生がこの日本に何人いるだろうか？考えてみてほしい。

先日の後期試験、私は各講義において課題提出や試験を行った。ソルフェージュの試験のときに私は実技にプラスもうひとつ試験をした。５つの音のみを使って即興で表現しなさい、という内容だった。瞬間に彼らがどのようにアプローチしてくるのか？その中に見える一挙動一挙動の中に彼らの「人間としての本質」が見えてくるのだ。そしてそれは一瞬ですべてが丸裸にされて見えてくるのだ。そこで彼らの「本質」を見ながら一人一人にアドバイスをしていった。特に２年生はもう卒業してしまうので私からの最後のアドバイスになる。どれだけの学生が本当の自分自身を見つけ人生を生きていくのだろうか？がんばって生き抜いてほしい、その想いでいっぱいである。

人は目を閉じたがる。視野を狭くしたがるし逃げたくもなるだろう。だが、もしかして目を閉じたその先に自身の未来や生きてきた軌跡が結果が、生き様が、その夢と希望が閉じた目の奥に輝いてくることを心から願う。なお、今回から写真ではなく挿絵を使いたいと思い、画家の前川久美子さんに今後福島日記の挿絵を描いてもらうことにした。彼女もまたこれから先を絵描きとして生きていこうとがんばっている一人である。

（こにし・てつろう　作曲会員）

挿絵：前川 久美子（まえかわ・くみこ　山口芸術短期大学在学中）

コンサート案内

社会福祉法人　緑の風を支援するチャリティーコンサート

世界にはばたくヤングアーティストシリーズ
第１回　若きミューズの競演！

2013 年 2 月 23 日（土）　千駄ヶ谷　津田ホール　14:30 開演(14:00 開場)

山梨県北杜市にある社会福祉法人緑の風は、知的障碍のある人たちが地域で自分らしく暮らし、地域で働くことの支援を行うための障害福祉サービス事業所です。また、千代田区より障害者就労支援事業所（ジョブ・サポート・プラザちよだ）の運営を受託し、パン工房/ショップ（さくらベーカリー）と併せて同区役所内での活動を展開しています。

2003 年 6 月に「緑の風」を支える組織として後援会「麦の会」は発足し、毎年チャリティーコンサートを開催しています。日本音楽舞踊会議の代表理事で、麦の会の評議員をしていただいている深沢亮子さんには、これまで永年にわたりコンサートの企画･演奏に携わっていただいておりましたが、今回より国内外で高く評価され活躍中の若手演奏家による新しいコンサートシリーズを始めることになりました。第１回目は若きミューズの競演と題して、ハープとフルートを中心に演奏者へのインタビューも交えて、これまでとは少し趣の異なるコンサートを企画しました。コンサートについてのお問合せは、麦の会(03-3556-3057)までお願い致します。

《当日のプログラム》

出演　景山梨乃（ハープ）／森岡有裕子（フルート）
緑の風チェンバーオーケストラ

演奏曲目

ハイドン	交響曲第１番　二長調
ドビュッシー	パンの笛（フルート独奏）
ドヴィエンヌ	フルートとヴィオラのための二重奏曲第３番
サルツェド	バラード　op.28（ハープ独奏）
モーツァルト	フルートとハープのための協奏曲ハ長調　K290

お話しとインタビュー：岡山潔

社会福祉法人緑の風 後援会麦の会

『kayoko の倍音サロン』のお知らせ

『kayoko の倍音サロン』日程と場所とテーマが決まりました！
2013 年、1 月 11 日からはじまります。
①1 月 11 日（金）19 時～：倍音と「三途の川の向こうで」（髙田三郎の響き）
②1 月 25 日（金）19 時～：倍音と「うたたねの向こうで」（シューマンの生きざま）
③2 月 8 日（金）19 時～：倍音と「月夜のジャガイモ畑」（ベートーベンの散歩）

この 3 回で 1 クールです。隔週の金曜日です。1 時間半くらいの番組です。それぞれの回に、絵本セラピスト山本潤子さんのコーナーがあります。
これも実は倍音と関係あります。そのあたりもいっしょに探って体験しましょう。
倍音と心。
倍音は、私の人生、音楽体験と深い結びつきがあります。

場所は　下北沢の音倉です。
http://www.otokura.jp/access/

（会費は 1 回が 3000 円＋500 円 1 ドリンクくらいに設定する予定です。
ご友人とお誘いあわせの上、ぜひ金曜の夕べを楽しみにいらしてください。またお知り合いの方にシェアメールで案内をお送りしてくださると、うれしいです。
よろしくおねがいいたします。

ピアノ　　松下佳代子

お同い合わせ・お申し込み：
KAYOKO　institute, LLC、かよこ：インスティチュート事務局 菊池正己
TEL.090-5686-0904 E-Mail:masami.online@gmail.com

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

夜叉神峠より南アルプス白峰三山を望む

会と会員の情報

ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

1　月

7日(月)**定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　16:00～17:30】**
日本音楽舞踊会議 新年会【高田馬場「夢々」18：00 会費5,000円】
12日(土) 中嶋恒雄(作曲)－ 講演会「音楽と思想－未発表作品の公開－」
2012.11.1～2013.1.14多摩美術大学美術館にて開催中のモノミナヒカル展～佐藤慶二郎の躍動するオブジェ展～のイベント
【問合せ：多摩美術大学美術館　TEL042-357-1251】
14日(月祝)**作曲部会2013年度総会【日本音楽舞踊会議事務所　14:00～16:00】**
20日(日)**『音楽の世界』編集会議　【日本音楽舞踊会議事務所　14:00～16:00】**
25日(金) **声楽部会公演「2013年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」**
【開演：18：30　料金：2500円　すみだトリフォニー小ホール】
（詳細は裏表紙のチラシ参照）
27日(日) 深沢亮子(Pf.)－　東金文化会館創立２５周年記念コンサート
ソロと室内楽　共演：中村静香(Va.)、上村文乃（Vc.）
【問合せ：東金文化会館　0475-55-6211】
27日(日) 原口摩純(Pf.)－　ピティナ北横浜ステップにてトークコンサート
【横浜市青葉公会堂】

2　月

7日(木) **定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
11日(月祝) **日本音楽舞踊会議平成２４年度第５１期定期総会**
【新宿文化センター第5会議室（1階）13:15-16:45】
11日(月祝)原口摩純(Pf.)「ランチタイム・コンサート」【名古屋宗次ホール
入場料1000円問合せ・申込み:宗次ホール052265-1715】
12日(火) 深沢亮子(Pf.)－　共演：城代さや香（Va.）
モーツァルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ B-Dur K.454
ドビュッシー：ヴァイオリンとピアノの為のソナタ
【新宿住友ビル７Ｆ　朝日カルチャーセンター13:00
問合せ：朝日カルチャーセンター tel 03-3344-1945】
12日(火) 原口摩純(Pf.)－　東洋英和女学院大学「コンサート＆レクチャー」
【10:40～12:10講座費2,500円
問合せ:東洋英和女学院大学045－922-5513】
18日(月) **動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ**
【すみだトリフォニー小ホール　18:30開演　全自由席3,000円】
プログラム
１．チェンバロのための小組曲「ミステリー劇場」：高橋通作曲
蒜見四津彦氏の事件簿から～愛猫たま誘拐事件
チェンバロ：栗栖麻衣子・語り（作曲家）：高橋通・パフォーマー（探偵）：未定
２．アラブ音楽とベリーダンス：
イブンエルバラッド・祖国の息子(Ibn el Balad)
エンタウムリ・あなたは私のいのち(Enta Omri)
作曲：Mohammed Abdel Wahab・ベリーダンサー：yasuko　ウード：荻野仁子
ダルブッカ：山宮英仁
３．野田暉行作曲：邦楽器のための四重奏曲 第三番「松の曲」
邦楽四重奏団：尺八：黒田静鏡、箏Ⅰ：平田紀子、箏Ⅱ：中島裕康、十七絃：寺井結子
４．ミヨー作曲：ポルカ　Polka Op.237-3
ミヨー作曲:スカラムーシュ　Scaramoche Op.165b

１．ヴィフ　Vif　２．モデーレ　Modere ３．ブラジレイラ　Brazileira
Piano Duo:戸引小夜子(Primo)、小崎幸子(Second)
ダンス：矢萩もえみ・パーカッション：谷本祥子
５．古典と現代を舞いわける
黒髪：湖出市十郎作曲
水炎：高橋通作曲
地歌舞：花崎さみ八・一絃琴：高橋 通・箏：高橋澄子
６．“ミステリーゾーン”　～舞踊と電子音響のための～
“Mystery Zone” for Dance and Electronic sound
作曲：中島洋一
舞踊：井上恵美子ダンスカンパニー　　振付：井上恵美子
天野美和子・大縄みなみ・津田ゆず香・小野めぐ美・柴野由里香・小出里英子
江上万絢・赤井捺美
22日(金)**『音楽の世界』編集会議(仮)　【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
23日(土)社会福祉法人みどりの会を支援するチャリティーコンサート
世界にはばたくヤングアーティストシリーズ第１回　若きミューズの共演！
曲目：ハイドン：交響曲・ドビュッシーパンの笛　他
出演:景山梨乃(Hap)　森岡有裕子(Fl) 緑の風チェンバーオーケストラ
【千駄ヶ谷　津田ホール　14:30開演(14:00 開場）】

3　月

3日(日)**ピアノ部会試演会【10:00～12:00　新井知子会員宅】**
7日(木) **定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
12日(火) 深沢亮子(Pf.)－　共演：中村静香（Vn.）
シューベルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナチネ No２　a-moll D.385
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ No10 G-Dur op.96
【新宿住友ビル７Ｆ　朝日カルチャーセンター 13：00
問合せ：朝日カルチャーセンター03-3344-1945】
15日(金)**第５回フランス歌曲研究コンサート【中目黒GTプラザホール】**
（詳細未定）
28日(木) 深沢亮子(Pf.)－　シューベルト幻想曲（連弾）他共演：草野明子
【19:00ヤマハ銀座コンサートサロン】03－3572－3132（ヤマハ銀座店）

4　月

1日(月) 原口摩純(Pf.) ＆ 石川寛(Vn.)～ソロとデュオのリサイタル～
ブラームス：Pf.とVn.の為のソナタ第１番「雨の歌」他【東京文化会館小ホール19:00開演　一般3,500円 **日本音楽舞踊会議後援】**
5日(金)**ＣＭＤＪフレッシュコンサート２０１３**
～より豊かな音楽の未来をめざして～
【すみだトリフォニー小ホール　18:30開演　2,500円 】《詳細企画中》
8日(月) **定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所　19:00～】**
20日(土)深沢亮子(Pf.)－共演：瀬川祥子（Vn)
モーツァルト：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ B-Dur K.454
シューベルト：ソナチネ　No.3　g-moll　D.408
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ No.10　G-Dur op.96
【新宿住友ビル７階　朝日カルチャーセンター　午後（時間未定）
問合せ：TEL 03-3344-1945】
27日(土)金子みすゞ生誕110年記念＜金子みすゞの世界＞
～東日本大震災復興支コンサート～
西山淑子作曲：歌と朗読による＜金子みすゞの世界＞みすゞの生きた時代の童謡
【14：00開演　市川市市民会館大ホール　入場料：一般　2,000円　高校生まで＆障がい者　1,000円　**日本音楽舞踊会議後援】**
出演　歌：浦　富美・渡辺裕子・杵島純子
作曲＆エレクトーン：西山淑子　合唱：コーロフィオーリ 他

5　月

23 日(木) 深沢亮子(Pf.)－　曲目未定 共演:藤井洋子(Cl.) H.ミュラー(Va.)
【19:00 小金井市民交流センター】 問合せ:042‐387-7728（鈴木）

6　月
14 日(金) **作曲部会公演【すみだトリフォニーホール小ホール】詳細未定**

7　月
4 日(木)**ピアノ部会公演**
【杉並公会堂小ホール 19:00 開演】詳細未定　出演者募集中
問合せは実行委員 原口摩純、山下早苗　まで
5 日(金) **声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」（仮称）**
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定
21 日(日)「翔の会」20 周年記念コンサート　深沢亮子賛助出演
【浜離宮朝日ホール 13:30】
21 日(日) 日本尺八連盟埼玉支部定期演奏会－
高橋雅光作曲：尺八・箏・十七弦による大合奏曲「彩の国の旅路」(初演)
【久喜市民文化会館 14:00 開演　入場料 3,000 円】

9　月
16 日(月)深沢亮子―デビュー60 周年 連弾と 2 台のピアノ作品による
共演：野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子、栗栖麻衣子
予定　モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品
【浜離宮朝日ホール】14:00　問合せ:03－3561－5012（新演奏家協会）
26 日(木) **CMDJ 2013 年オペラコンサート**
【すみだトリフォニー 小ホール】詳細未定

１０月
28 日(月) 様々な音の風景Ｘ～20 世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー 小ホール 】詳細未定

１１月
8 日(金)**若い翼による CMDJ コンサート６**
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定・出演者募集中

１２月
6 日(金)**深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ”（仮称）**
出演：深沢亮子(Pf.)恵藤久美子(Vn.)安田謙一郎(Vc.)
【音楽の友ホール　詳細未定】

****

会員スケジュールの表示（凡例）について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。
明朝体文字は会員から寄せられた情報、および、会関係者が企画、参加して居る事業の情報です。
明朝体太文字は、運営に関わる会議等の予定です。
「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上項目内容を変更する場合があります。

正会員・準会員・賛助会員の皆様へ

〇上記スケジュールに記載の本会主催事業には、会員・準会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料または会員割引料金でご入場頂けます。
〇会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。
〇お知らせの際は、①〇月〇日(曜日)②会員名　③催し物(出版物等)名④メインプログラム一曲名、もしくは公演・講演の内容を一つ　⑤【開催場所】、開演時間、入場券価格、等の順番でお書きください。

新年会のご案内

日本音楽舞踊会議は 1962 年 6 月に設立されておりますので。2012 年は、本会にとって創立 50 周年に当たる年でした。この半世紀は、変動の大きな時代でありましたが、本会はこの時代を逞しく生き続け、コンサート、研究会などの活動を精力的に行いながら、機関誌『月刊音楽の世界』を発行し続けてまいりました。そして、2013 年度からは、新たな時代の第一歩を歩み始めることになります。

いまの時代は、我が国だけでなく、世界的にみても政治的混迷と、経済的停滞の中にあり、必ずしも生きやすい時代ではないかもしれません。しかし、そのような時代だからこそ、人々を慰め、勇気づけるためにも、音楽をはじめとする芸術の力が必要なのではないでしょうか。この会がさらに新しい半世紀を生き続け、創立 100 年を迎えられるかどうかは、判りませんが、それを実現する気概をもって、新しい半世紀を歩み始めようではありませんか。

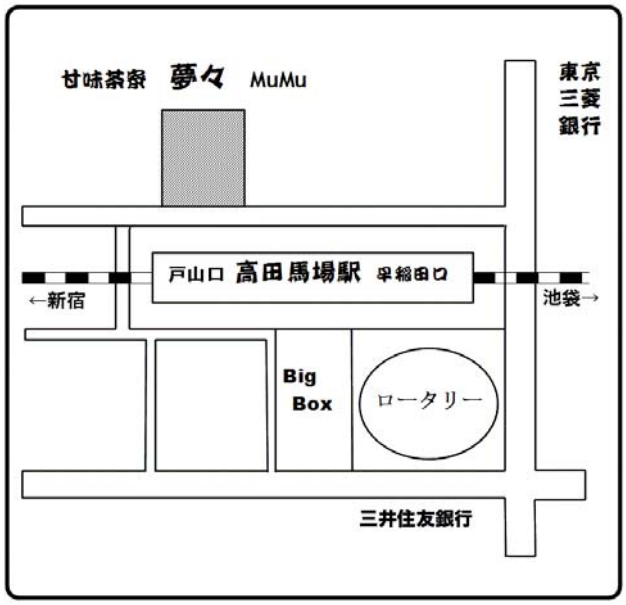
新しい半世紀を、明るく元気に迎えるため、2013 年も例年のごとく、1 月 7 日に甘味茶寮「夢々 MuMu」にて新年会を開催します。古くからの会員はもちろんですが、新しい時代を担う若い人達の参加を期待します。また、会員の方々はもちろんですが、『音楽の世界』の読者の方々なども遠慮なさらずに参加してください。みんなで打ち解けて、分け隔てなく語り合い、そして、飲んで、食べて、歌う楽しい会にしたいと思います。多数の方々の参加を期待します。

代表理事：助川 敏弥、深沢 亮子
理事長：戸引 小夜子／機関誌編集長：中島 洋一（文責）

日本音楽舞踊会議　2013年　新年会

【日時】2013 年 1 月 7 日（月）18:00～20:00
【会場】甘味茶寮「夢々 MuMu」
【会費】５,０００円

会場住所：東京都新宿区高田馬場 4-4-34
電話：03-3368-6166
会場へのアクセス：
JR 高田馬場駅の戸山口を出て　右折。
５０ｍほどの左側です。（地図参照）



編集後記

昨年は、オリンピックのメダルラッシュ、北朝鮮のミサイル発射、衆議院の解散と総選挙など、色々なことがありました。暗いニュースの方が多かったような気がしますが、一昨年に比べれば明るいニュースもあったのが救いです。さて、今年はどんな年になるでしょうか。これは私の勘ですが、今年は変わり目の年で、我々の心の持ち方次第で良い方にも悪い方にも向かう年のような気がします。もちろん甘く考えてはいけませんが、気合いを入れて前に進めば道が開けると信じて、新しい年を歩みはじめようではありませんか。今月号から新しい企画：リレー連載『未来の音楽人へ』の掲載がはじまりました。第１回は本会の代表理事でピアニストの深沢亮子さんです。このシリーズは特に若い音楽家の方々に読んでいただきたいと思います。きっと、これからの音楽人生の糧となる何かをもたらしてくれると思います。

（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橋川 琢　高橋 通　湯浅玲子
編集部員：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　小西徹郎　高島和義　高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦

音楽の世界１月号(通巻 545 号)
2013 年 1 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場 4－1－6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http:// cmdj1962.com/　　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　（アーカイブ）
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　（6 ヶ月：2500 円）　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします